SOUL DEEPERS

壬生京次

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＳＯＵＬ　ＤＥＥＰＥＲＳ

【Ｎコード】

Ｎ０３０８Ｘ

【作者名】

壬生京次

【あらすじ】

ソウルイーターの世界で、Ｓ．Ｄ．ＫＹＯのキャラを中心に様々な作品のキャラが大暴れをします。

緊張感ゼロの始まりってどうよ？（前書き）

作者の妄想垂れ流しだし、小説初投稿なのでが、それでもいいよって方は、暖かい眼で見てください。

緊張感ゼロの始まりってどうよ？

健全なる魂は

健全なる精神と

健全なる肉体に宿る

壬生再臨計画から数世紀後・・・陰陽堂廃墟から先代紅の王の心臓が発見された・・

紅の十字を刻んだ心臓は、死神のいる街「デスシティー」の地下に封印された・・・

そして、今も尚、音を立てて、眠っている・・・

「まぁ～ぶっちゃけ～今行方不明の鬼眼の狂ちゃんに頼まれて～封印しちゃたんだけど～

なぁんで私に頼んだんだろ～あの子わけわかんないよね～マジ意味不明～」

この人は・・というか、この黒い方が死神

通称「死神様」

死神武器職人専門学校略して「死武専」の校長先生である

「あっ説明そんくらいでいいよ～どうせプロローグとかあるんだしさ～」

あっそうですか。じゃあ、後はよろしくお願いします。

死神様以外全員「ズコーーー！」
「君軽いね～真面目な正確かと思ってたんだけど～まぁいっかこの作品自体作者の妄想垂れ流しだから。」

ポン！！

ポン！！

「じゃあ、次回から、張り切って、いってみようか！！」

死神様以外全員「次回からかよ！！！」

緊張感ゼロの始まりってどうよ？（後書き）

期待していた方も、そうでもない方も、本当にすみませんでした。
明日からキチンと第一話から入って行きたいと思います。
大まかな流れもできているので、大丈夫です。
だから、期待してた方もどってきてください。
お願いします。

第一話　課外補習　水の亡霊を打ち破れ　その１　（前書き）

先代紅の王「長らくお待たせしました。第一話スタートします。時代背景などは、後書きで説明させていただきます。」

第一話　課外補習　水の亡霊を打ち破れ　その１

ここは、「デスシティー」死神様の管理の元、多くの人達が住んでいる。
武器　職人　人間　侍　超能力者等多くの者が存在する。
そんな中、死神様の武器、「デスサイズ」を作ろうとしている少年と、少女がいた。

ジリリリリリリリ！！！
ガンッ！！
「んあ～、魂超うめ～」
この超熟睡中で、銀髪の少年は
ソウル＝イーター
武器であり魔鎌である。間違っても「オカマ」と言わないように
「ソウル君、早く起きないと遅刻しちゃうよ？
それとも、このままブレアといい事しちゃう？」
このソウルのお腹のうえに乗っているエロい猫魔女？は

ブレア

魔力がこもった「猫」である。けっして魔女ではない

「ブッブレアやめろ！！こんなのマカに見られたら・・・」

そして・・・

ガチャ！！

「ソウル♪早くご飯食って学校行こ・・・うよ・・・・・」

彼女が、ソウルの職人。

「マカ＝アルバーン」

である。死武専一の優等生なのだが・・・

バキッ

ガッシャァァァァァァン！！！！！

「ソウルのばかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

コンビ中は、あまりいい方ではない。

「こんなの・・・・COOLじゃねえ・・・」

と、ソウルは呟いた。

KILL～コ～ンカ～ンコ～ン　KILL～コ～ンカ～ンコ～ン

「おい、マカ」

「うるさい、今本を読んでいるの。邪魔しないで！」

「何怒ってんだよ？ガリ勉野郎」

「うるさい、オカマ野郎！」

「それをパートナーに言うか？普通！！」

と、いつも通りにケンカしていると、

「お～、また夫婦喧嘩か？」

「夫婦愛熱烈だな～」

ソウル＆マカ「「誰が！！」」

と、彼らのクラスメートの、「遠野志貴」と「上条当麻」が冷やかしながら来た。

メガネをかけた少年は
遠野志貴。月姫の主人公で、遠野家という大きな家の長男である。
ここでは、かなりエリートな生徒である。

そして、もう一人のウニ頭の少年は
上条当麻。とある魔術の禁書目録の主人公である。
ここでは、ソウル同様あまり成績は良くないようだ。

「そういえば、聞いたか？ソウル、マカ。」

と、志貴は二人に聞く。

「え？何が？」

「最近、死武専で噂になってる、ほら、濃硫酸のプールで死んだ先輩の話。」

「どんな死に方だよ・・」

「俺も、最初聞いた時に、本気でそう思ったぜ。」

ソウルと当麻は冷静に突っ込んだ。

「ああ～。アレね、辰怜先輩の。自爆事件ね。それがどうかしたの？遠野君？」

「実は、それに関して、マカとソウルに超大事な話があるからって死神様が来いっていってたんだ。授業は、今日はいいって。」

「え？何だろ？まぁ良いや。とりあえずいってくる。」

また後でね、上条君、遠野君。」

「ああ。後でな。」

こうして、ソウルとマカは、デスルームに行った。

そして、デスルーム

「失礼しまーす。・・・何だろうね？、大事な話って。」

「知るかよ、そんなこと。」

そうこう話をしていると

「ふっ、背後に隙を見せるとは、油断大敵だぜ！！マカよ！！その首もらうぜ！！」

ブラック☆スターが、命を狙っていた。だが・・

「あ、ブラック☆スターいたんだ。あんたも呼ばれたの？」

「お前、そこでなにしてんだ？」

あっさりソウルとマカに気づかれた。

「ほらー、そうやって大声出すからチャンスなくすんだよ。」

この和風美女の女の子は「中務椿」
暗殺魔武器で、ブラック☆スターのパートナーである。武器としての型が多く統一していない。

「くっ、暗殺に対する期待感と、目立ちたい意欲が混ざってチャンスを手放したか！！」

そして、この目立ちたがりの少年が、「ブラック☆スター」椿の職人である。
実力は誰もが認めるが、実績は、魂ゼロである。

「どうやら、呼ばれたのは俺たちだけのようだな。」

と、ソウルは確信した。

「うん、そうみたい。じゃあ、死神様呼ぶね。」

そして、マカは鏡に番号をなぞった。

プルルル　プルルル

ガチャ

「チィーす！！　皆さん元気～？？」

死神様が出た。

「おはようございます。死神様。何ですか？お話って？」

「うん。それなんだけどさ～まず、君たちの義務って何？」

「死神様の為に、９９個の魂と、１個の魔女の魂を集め、デスサイズを作り出すことです。」

「ウンウン。よく分かってるね♪
　でも、君達の今現在の魂の数って・・・ゼロじゃん？？」

「・・・あはははは・・・・・」

ブラック☆スター以外全員乾いた笑しかでなかった。

「というわけで～君達には，補習を受けてもらいまーす？！！！」

「え～～～～～～！！！補習～～～～～～！！！？」

ブラック☆スター全員驚きを隠せなかった。そもそも死武専では、補習を受けること自体醜態なのだから。

「はい、補習です♪　補習内容は，君達も聞いているよね？辰怜君のこと。」

と死神様は言う。

「辰怜先輩の自爆事件ですか？」

「そう、マカちゃん。それなんだけど、実は、何者かの手によって復活しちゃったわけなのよ。それで、後輩にも同じ目に合わせてやるって、墓地で大暴れして困るのよ。」

「分かったぜ死神の旦那！！ようは、その辰怜ってやつとそいつを蘇らしたやつをぶっとばせば良いんだろ？」

「はい、そゆこと。流石ブラック☆スター話が早いね。あ、ちなみに、このミッション失敗したら、君達退学だからね～♪」

「エェーーーーーーーーー！！？退学ーーーーーーーーー？？？！！！」

「じゃあガンバッてねーー♪♪」

なんと死神様直々のある意味死刑宣告。マカ達に挽回できるか？

次回に続く

第一話　課外補習　水の亡霊を打ち破れ　その１　（後書き）

先代紅の王「はい、第一話をお読みくださってありがとうございました。
それでは、時代背景説明をしましょう。
時代背景は、以下の通りです。」

ソウルイーター・・・・ソウルが魂ゼロのあたりからスタート。
Ｓ．Ｄ．ＫＹＯ・・・壬生再臨計画から後のオリジナル設定で狂の力で壬生一族のもの達を復活させ、人間の仲間が死んだ後、行方不明になった。もちろん、死んだだけで出番がないわけではない。
その他・・・基本的になんでもあり

先代紅の王「質問や、キャラのリクエストなどがあれば感想欄の一言にお書きください。では、第２話までごきげんよう。」

第２話　課外補習　水の亡霊を打ち破れ　その２（前書き）

先代「さて、いよいよ、初のバトルシーンです。
マカたちは、果たして退学を逃れるか？
そして、オリジナルの技も出ます。
では、ＳＯＵＬ　ＤＥＥＰＥＲＳ　第２話をどうぞ。」

第2話　課外補習　水の亡霊を打ち破れ　その2

そして噂の墓地

「オラ～さっさと出てこい！！
熱血で水オタクの辰怜大先輩よー！！！！」
ソウルは、完全に壊れていた。

「なあ、椿。あいつ動き回ってんだろ？なんでこんなところに来ているんだ？」

「辰怜先輩は、元は規律を守る熱血風紀委員長だから、案外落ちこぼれの私達を、正面から待っているんじゃないかな～と思って。」

・・・・・・ゴポッ　ゴゴゴゴゴゴゴゴ

「退学になってたまるかよ！！出てこいや！！テメェーの指導まともに聞いたことがねぇーんだわぎゃはははは！！」

（ソウル君・・・壊れている？）

壊れてしまったソウルに、若干引いてしまった椿だった。

「私、お母さんみたいに、立派な鎌職人目指していたのに、お、お、お、落ちこぼれ・・・・」

マカも、精神がほぼ崩壊していた。

「あいつ、　何しょげんてんだ？」

「ブラック☆スターは、少しは気にしよ？・・・・ね？」

椿も、だんだんと虚しくなってきた。

・・・・・・・ゴゴゴゴゴゴゴゴ

「なあソウル、辰怜の墓にションベンでもひっかけてやろうぜ♪ひゃっはははは！！」

「オウオウ！！やってやれ！！ついでにクソもひねり出せ！！ＣＯ

ＯＬにな！！」

「・・・私、立てるかしら・・・うん立てる・・・まだ・・・いける・・・でもたてない・・・」

(誰か、彼らを止めてー・・・；)

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「？？？？」

ゴバァッッッ！！！！！

「わぁあ！！！」

マカは、いきなり出た辰怜に足を掴まえられた。

「怖いか？・・・・怖いだろ？！」
そう言いながら、辰怜は、舞曲の太刀をだしマカに斬りかけた。

「えっ！？」

「オオオオ！！」
ソウルは、変身しながら辰怜に向かった。

「っ！！！チィィ！！」

「ありがとう、ソウル。助かった。」

「おう！！」

「奇襲は、失敗か。まあ良い。次こそ殺す。」

辰怜は、そう言いながら、両手に舞曲の太刀を揃えた。

（・・・あれが辰怜先輩？？皮膚が焼きただれて昔の面影があんまりない。）

そう。辰怜の顔や腕の皮膚は、濃硫酸によって、少し火傷のあとがあった。

「マカとソウルとブラック☆スターに椿か。おはよう！！こんにちは！！こんばんわ！！あいさつは、キチンとやる。それが国によって定められた規律だ！！」

一方デスルーム

（うるせぇあいさつだ！！椿！！俺たちもいくぜ！！）
（はい！！）

「・・・始まったね・・・」

デスルームで４人の戦いを見ていた。

そして・・・

「なんであんなことをしているの？？先輩！？」

マカは、そう聞いた。しかし

「ピーーーー！！ゾンビはいいぞ！いろんなことを無視できる。俺の指導を始めるぞ。お前らの規律をもう一度立て直してやる！！」

辰怜は、はぐらかす様にそういった。

「いいぜ。久しぶりに見せてやる。お前の小さな規律に収まりつかないぐらいの、俺様の生活態度をな！！」

「こっちは退学がかかってんだ！！受けてやるよ！！テメェーの暑苦しい、うぜえ指導をな！！」

「無駄な努力はやめるんだな。どうせいつかは死ぬんだ。ゾンビになればその恐怖からぬけられるんだ。お前らもそうゆうのは、一度は欲しかったはずだ！！」

「そんなの間違ってる！！規律を守ってた先輩は、そんな事いう人じゃなかった！！」

次の瞬間

「聞くより習え！！」

（？！なんで？！全然関係ないところに？！）

マカは、驚いた。それもそのはず。辰怜は、マカの身体の隣に刃を振り下ろした。

しかし、首とちょうど同じ場所にきた瞬間。

シュン！！　　カクン！！

（えっ！　？）

「とりあえず、死ね！」

刃の角度が変わり、マカの首に向かった！！

「マカ！！」

ガキィ！！！

「！！ブラック☆スター！！」

ブラック☆スターが攻撃を防いだ。

「俺は、結構せっかちだからな！！さっさと終わらせるぜ！！」

ガキィ！！！　ガキィ！！！

「おわあ！！！」

「わああ！！」

ズザザザザ！！

「ゴメン。ブラック☆スター・・」

「お前　小物　俺　大物　気にすんな！！」

「さっさと諦めろ。所詮お前ら「下級生」では俺には勝てない。」

「ゾンビだろうが魂食われちまえば終わりだろうが！！」

ソウルがそういうと。

「・・・やっぱり辰怜先輩は強い・・私達下級生と違って、先輩は「元五曜星」だった…」

マカは、改めて辰怜の強さを認めた。

「流石は、大先輩だな。だけど先輩がこんな虐待じみたことをしてもいいのか？」

「これは虐待じゃない、後輩のための指導だ！」

そう誤魔化した。

「ピーー！！　さて、２つめの指導をはじめよう。この指導が終わる頃には、お前らも死ぬぞ。」

マカたちは、死刑宣告された。

そして、もう一方

マカ・ソウル宅　浴室（入浴中）

「パンパンプキン♪パンプキン♪　ブラシさん？」

「ヘイ！」

「次は足を洗って？・・・暇ね～ブレアも学校行こうかな～」

（マカとソウル君楽しそうだもんな～）

そして墓地

ガキィ！！！　ドコ！！ズギャン！！

「どうした！！二人掛かりだのに息が全くあってないないぞ！！しかも、「魂の波長」がバラバラだ！！」

「魂狙っている相手にアドバイスですか！！？」

「俺は、お前らの先輩であり、熱血風紀委員長！！学校のレベル向上のためならば手段は、選ばない！！」

そう言いながら、ブラック☆スターに猛スピードで近付いた。

「な！！」

「俺のとっておきをくれてやる！！くらえ！！」

舞曲の太刀　「激水龍の舞」

ズババババババババ！！

「ガアァ！！」

「ブラック☆スター！！」

（ただでさえ避けにくい舞曲の太刀をフルパワー、フルスイングでこうげきするなんて・・ここまで戦えるものなの？）

・・・これが五曜星・・・

「ピーー！！・・指導も終わり・・・お前もそろそろ死ぬか？」

「・・・・・・」

「どうだ？死は怖いだろ？ゾンビになれば死から逃れられるぞ！」

むくり・・

「ブラック☆スター！！」

（プチッ）

「あーーーー！！アッタマ来たぜ・・・ごちゃごちゃうるせえ熱血野郎！！
お前の指導なんて最初から始まってねぇんだよ！！オレ・オン・ステージだろが！！」

ドズルルルルルルル！！

「！！？鎖鎌か！！」

「下級生も五曜星もかんけぇーねぇー！！！」

ブラック☆スターは、鎖鎌で逃げ道をふさいだ。

タンッ　タンッ　タンッ

「俺はー！！！ブラック☆スターだ！！！！」

ドゴォ！！

「ガアァ！！」（人体の中心線上の急所の一つ水月（鳩尾）をてきかくにうちこんできやがった！）

「流石ブラック☆スター。暗殺術に長けてるわ」
マカは、改めてブラック☆スターのセンスに驚いた。

「休ませねぇ！！椿！！モード「手裏剣」！！」

「はい！！」

ボン！！

「ヒャハァ～～☆」

ブン！！

「甘いな！！こんな攻撃、ぬるいわ！！」

バッ！！

マカたちの所に飛びついた。

「マカ！！　来るぞ！！」

「うん！！」

「死ぬがいい！！」

舞曲の太刀　「激水龍の舞」

ズバババババババババ

ガキィ！！！

「な・・・何ぃぃ！！」

マカは、鎌の端と端で、舞曲の太刀の隙間にいれ、攻撃を防いだ。

「恐怖心があるから、人は誰もが強くなろうと思うんだ！！」

タン！！

ゲシ！！

「ぐっ！！」

デスルームのなか、死神様は言った。

「恐怖」を感じないというのは普通は無謀な事だけど・・・マカちゃんには・・・「恐怖」と戦う

「勇気」がある！！

ドン！！

「ぐあぁぁ！！」

そして

「マカ！！アレをやるぞ！！「魂の波長」を合わせろ！！」

「でも、アレはまだ一度も成功してないよ？」

「できる！！俺たちならやれる！！」

ガシャ！

「うん！！」

「魂の

共鳴」！！

「！！？」

「バカな・・・あれは！！」

（これは！！）

鎌職人　伝統の大技　「魔女狩り」！！！

しかし・・・

カクンッ

「いっ・・・や～ん」

ポーーーーン

ズギャア！！

「いゃぁぁぁぁあん！！！」

（・・・・・）

ズババババババババ！！

（・・・・・・・・・・）

先に沈黙をぶったのはブラック☆スターだった。

「何しやんがんだ！！殺す気か！！」

「もう！！ソウルのせいだからね！！バーカ！」

「はぁ！？ざけんな！！いかれてんじゃねえの！？死ね！！」

「死・・・死ね！？ヒドイ！！お前が死ね！！」

「うるせぇ！！焼け死ね！！」

「気が付いてはいたさ！！お前らが俺様のＢＩＧな魂を狙っていたのをな！！ひゃっはっはっは☆」

（だれか～・・・）

椿は飽きれて声も出なかった。

しかし辰怜はマカたちの話を聞かず・・・

（魔女狩り・・・なんて威力だ・・・）

魔女狩り威力に感心していた。

そして

「私は、大技なんかせず、シンプルにいきたかったのに」

「ＣＯＯＬな男はバクチ人生だろうが！！」

気を改めて辰怜に攻撃をしかけた。

「魔女狩りで俺を倒そうとしたのは褒めよう。だから俺も水龍を使ってお前らを倒す！！いくぞ！俺の「水舞台」を楽しめ！！！」

無明歳刑流　　水破封龍陣

ゴオオオオオ！！

水龍がマカたちを襲う

「こんな遅い龍で私達は倒せないわよ！！」

ズバァ！！

マカたちは、水龍を斬った。しかし・・・

「バカめ。こっからが本番だ」

「何！？」

グシャグシャ！バシャァァァ！！

水龍は、溶けて墓地一面を覆うくらいの水たまりが出来た。

「水たまり？なんでこんなものを？」

「知るか！！それより辰怜がいないぞ！！」

気がつくと辰怜がいない。

「しっかりしてくれよ。マイマスター？」

ソウルは冷やかすように言った。

「・・うるさいな～わかってるよ・・」

「・・・・」

ゴポッ

バシャァァァ！！

「えっ！？」

ズバッ！！

「がぁぁ！！」

「マカ！！」

バシャァァァ！！

「クソ！！また水たまりに消えやがった！！」

なす術なしのマカ。しかしブラック☆スターは

「・・・・」

「ブラック☆スター・・・・」

「ああ、わかってる。

辰怜がやってるのは「暗殺道其の一」！！」

「闇にまぎれ、息を殺し・・・目標の隙をうかがうべし。」

「椿！！奴の一歩先にいくぞ！！」

「はい！」

ふっ　ふっ　ふっ　ふっ　ふっ

（・・・！！何・・！！ブラック☆スターの呼吸法が変わった？・・・・このリズム、辰怜先輩の！！）

「何が「水舞台」だ水ゾンビが。最初から最後までずっと「俺舞台」だろうが。主役は、二人もイラネェんだよ。

俺が目立たねぇ。」

罠☆星

「暗殺道其の二

目標と同調し目標の思考・行動を推測せよ。」

コオオオオオオオオオオオ・・・・・

（集中しろ・・聞こえるぞ奴の「魂の波長」が）

ふっ　ふっ　ふっ　ふっ　ふっ

（・・・「椿」を通して伝わってくる）

「・・・・・・・・・」

（・・・呼吸が止まった・・・・）

（来る・・・・・）

ゴポッ　　ピシャァァァァ！！

罠☆星　　発動！！！

「食後に防腐剤でも飲んでおけ　海水の匂いがプンプン臭う。」

捕獲！！！

「ぐぅうう！！バカな！！！」

辰怜は掴まえられた。しかし・・・

「いっ・・・」

「ひゃっはっはっ☆」

「コラーー！！私も捕まえるなー！！」

「邪魔者はお前らも同じだ。」

そして、デスルーム

（早くはなせ！！殺してやる！！）

（ひやっはっは）

「ふむふむ。とりあえず、一段落かしら♪」

「ふ～ん。あとは、辰怜さんを蘇らせた黒幕でしょ？」

「そそ♪」

「誰なんだい父上」

ウリウリ　パタパタ

「コラ・・ジッとしてな」

「う？」

この三人組のうちの少年は、
死神様の息子　「デス・ザ・キッド」
通称「キッド」
次期死神候補である。

そして、残り二人の姉妹は、キッドのパートナー
トンプソン姉妹のリズ（姉）とパティ（妹）
どちらも武器としては、「二丁拳銃」である。

「辰怜さんを蘇らせたんだ。只者じゃないんだろ？」

「・・・・・」

そして、墓地

「言え！！コラ！！誰が蘇らせんだよ！！」

「早く行った方がいいですよ・・・「マカチョウプ」は痛いですよ～」

そう言いながら、マカは、本を準備した。

「どうした？ずいぶんとやる気だな？」

「お前がおいしいトコ全部持ってったからだよ！！」

あれも、ある意味おいしい役と思った方は、すくなくないばず。

「俺は絶対口を割らん！！侍として、恩の忠義は必ず返さんといかんからな！！」

ピクッ　ピクッ
「何熱く武士道たぎらせちゃってんだよ。死んでるくせによ～・・・・」
「・・・（イライライライライラ）」
ソウルとマカもだいぶイライラしてきた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

（ＣＯＯＬな男としてこのままじゃ終われねー。こいつの口は俺が絶対割らす。）

「・・・・・・ほれ」
チラッ
「あっ／／／／／」
椿の服がめくれ下着が丸見えになった。
「ぬぁ／／／／！！・・・ぐぅ・・・遊庵様だ／／／／／！！」
「よし！」
（秒殺かよ・・・／／／／／）
「そいつどこよ？」
「いまのは、不意打ちだったが、今度こそ絶対にわらん！！」
（クソ！！今度こそ負けられねぇ・・・）

そして、マカにもおなじことをした。

「さぁ・・・場所どこだ?速くこいつに言ってやれ。」

「・・・・は?」

「何か言えよ!!」

大失敗に終わった。だが・・・

「気にするな、誰もあんたを攻めねぇよ。」

「武士をなめてるかと思ってきれるとこだった・・・」

「今の行為は間違いなくＣＯＯＬじゃない・・・マカ・・・殺してくれ。」

タン!!　タン!!　タン!!

「ああ!安心しろ全員殺してやる!カドで!

三秒後

「遊庵様は、町外れの「落人村」にいます。ごめんなさい。（早口）

」

「ごめんなさい。」

「ごめんなさい。」

町外れの落人村・・・ごめんなさい・・・なさい・・・さい・・・・

女王様・・・

プツン

「やや！犯人わかったね～♪」

「何か変なフェードアウトで終わったけど・・・・・遊庵様・・・・

聞いた事ある・・・何者？」

「手強いよぉ～彼は・・・・」

落人村

「おっしゃ〜！！遊庵の兄貴いっちょ行ったれ〜！」
「おっしゃー！！遊庵、百枚瓦割いっきまーす！！」
「ヒュー！兄貴カッコい！！」

デスルーム

「ねぇ？キッド、壬生一族のグループで神と呼ばれた「大四老」って聞いた事ない？」
「うん。壬生一族の中でも神がかりに強い人たちが集まった・・・ってまさか！！」
「そう。遊庵は、大四老の中でもトップクラスの実力者で最後に大四老に入ってきた人だよ。

落人村

ザッ！！

「遊庵の居場所はここね！！」

第2話　～完～

第2話　課外補習　水の亡霊を打ち破れ　その2（後書き）

先代「ＳＯＵＬ　ＤＥＥＰＥＲＳ　第２話をご覧いただきありがとうございます。
さて、それではオリジナル技の解説をしたいと思います。

辰怜のオリジナルの技

舞曲の太刀　激水龍の舞

不規則の太刀の動きを利用し、相手を惑わし、動けなくさせる。
そして、全部の振りを全力でそして自身の持つ最速の振りであいてを斬り刻む。

モデルの技
るろうに剣心の剣心の九頭龍閃と蒼紫の流水の動きを参考にしました。

解説はいじょうです。
前回同様質問や、リクエストがあれば、感想の一言にお書きください。
それでは、第３話をお楽しみに～。」

第3話　神への挑戦　ぶっ放せ魔女狩り　その1（前書き）

先代紅の王「ついに黒幕が分かったマカ達、遊庵とは一体何者なのか？そして、彼の魂を回収できるのか？第3話始まります。」

第3話　神への挑戦　ぶっ放せ魔女狩り　その1

「遊庵・・強いよ・・マジで！」

と、死神様は言った。

「神と呼ばれた大四老の中でもトップクラスの体術使い・・」

「そいつの魂をとって来いって言うんだろ？」

「でも、お姉ちゃんなら楽勝だね？」

「な！？私はしがいない武器だよ？パティーはお姉ちゃん買い被りすぎだぞ？無難に即死だよ！」

リズはパティーの無茶ぶりに困惑した。

「父上・・補習にしては、その課題・・きつくない？」

「・・・」

キッドの問いに、死神様は沈黙を守った。

「間違いなく、死ぬよ・・・・」

落人村

「遊庵の兄貴、何か面白いことをしてくれよ！！」

「おっし、じゃあ俺の大好きなサンマの笑い声のモノマネを・・・・

おっと、来たか。」

「ん？どうした？兄貴？」

「悪い、客だ。あとはお前らでやっといてくれ！」

そう言い、遊庵は、宴会を後にした。

そして、マカたち

「ここに遊庵は、居るんだな」

「さっさと魂回収してかえろうぜ。」

「遊庵ってどんな人だろ」

マカがそう思うと

「どうせ落人村にいるぐらいだ。ろくな人間じゃねえ。」

ソウルは、そう皮肉った。すると

「ほう？いってくれるじゃねえか！」

「誰だ？（気配が全く感じられなかった！！）」

遊庵が現れた。

「お前が遊庵だな？お前の魂食いに来た。」

「お前等、死武専のガキどもだろ？」

（この人なんで目にバンダナをつけているの？）

「あなたでしょ？死武専の生徒を襲ってるのは？なんであんなことをしたの？」

「あんなこと？・・ああ！辰怜のことか。別に？理由なんてないぜ？俺は遊べればそれで良いんだよ！もちろん、魂も死体もな？」

ビクッ

「ねぇ？ソウル、なんか変な感じしない？」

「ん？そうか？」

「ケケケ♪お前等の魂ずいぶん安定してないな♪真面目で頑張り屋

とひねくれやで皮肉屋の魂。共鳴してるようでしていない。」

「何!?生きてる人間の魂が見えるのか?」

「しかも、性質まで見抜けるなんて超一流よ!」

「ケケケ♪俺は目が見えんが、心眼を極めて、人を心で見えるだけじゃなくて、魂までみえるようになったからな。」

(そのためのバンダナが。)

「マカ!!お前もバッチリ見えてるんだろ?な!!」

「・・・も・・もちろんよ・・・;」

「お!?ずいぶん魂が動揺したな。か~わいっ?」

「うるさーーーい!!見るな~!!///」

マカが動揺していると

「うるせえーうるせえー!!凡人どもの会話は終わりだ!!これからは俺様が中心の話だ!!」

「いつのまに・・・;」

ブラック☆スターがゴミのてっぺんで叫んだ。

「魂が見えるか見えないかしらねぇけどよ、俺は俺の魂が見えてりゃそれでよし!!」

「ほう？お前の魂すごいな～ものすごく自己主張の激しい魂だ。」

そう言ってると、ブラック☆スターが奇襲をしかけた。

「ひやっはっ☆」

「おめえのような魂に合うパートナーなんてそんなにいねえんじゃねえか？」

そう言い、ガードした後、ブラック☆スターに強烈なカウンターをした。

「ぐっ、うぐぁ！！！」

「ブラック☆スター！！」

チラッ

「ああ！なるほど、姉ちゃんがあいつのパートナーだな？」

「！？」

「人を受け入れる器が大きい。姉ちゃんがあいつの魂の波長に合わせてるんだな？」

「てめえ本当に何者だ！？」

「さ～てこいつ等のことは大体わかった。俺の魂が欲しいんだろ？・・死合をするか？」

ここはキャバクラ「チュパ？キャバクラ」

「だ～はっはっは、お酒きれちゃったよ～♪」

「パパさん早いな♪ちょっと待ってね、パンパンプキン♪パンプキン♪ヒョイ♪」

「デスサイズ殿、少し飲みすぎでござらんか？というか、なんで拙者を読んだのでござるか？」

「お前しか暇がなかったからな。大丈夫薫ちゃんには内緒にしとくからな♪」

ここにデスサイズとブレアと剣心がいた。

緋村剣心は「るろうに剣心」の主人公である。
ここでは、死武専の体育教師であり、マカとデスサイズのよき相談相手である。

「そういえば、今日は学校に行ったでござろう。マカ殿とはうまくいったか？」

「・・・ウルウル（涙）」

「おろ？」

「無視された・・たまたますれ違って挨拶したけど無視されたよ。あの子パパが何をやってもプンスカ怒るんだ。」

「クスマカったらかっわぃ？」

「しかし、先月に離婚が正式にきまったでござろう。気持ちを切り替えるてござるよ。」

「切り替えるって言っても、親権も完全に元かみさんのものだし、何もいらないっていうんだぜ・・俺はマカの何なんだよ・・・」

「そんなことはないわよ、お金を出すのが親の仕事じゃないんだしさ♪」

「じゃあ、ここは離婚の原因になった女癖をなおして新しい妻を見つけるでござるよ。頑張るでござるよ！」

「そんな・・再婚なんて考えられないよ、ぐすん。・・こんな日々、シュタインと組んで、遊庵と共に任務をやった時以来だ・・・。」

「っ！？遊庵殿と一体なにがあったでござるか？」

「パパさん話してみてよ。」

「うおおおおおおおお！！！」

「鎌職人のマカ・・・」

ドン！！

「いた！！」

「ぐあ！！」

「なーんだったかな～？鎌職人マカ・・・どこかで聞いたような・・あっ！！！」

「！！？」

「おめえ、スピリットの娘か！？」

「スピリット？」

「パパがデスサイズになる前の名前よ、でも何で知ってるの？」

「思い出すな～あいつの寝顔♪」

「シュタインはともかく、あいつとの日々は地獄だったよ・・あいつ、俺が寝てる間に・・」

「一体・・何が・・」

「あいつ！！寝てる間に、身体中（顔も背中も含む）刺青と落書きだらけにしてたんだ！！しかも5年間！！」

「5、5年間！！？よく気づかなかったでござるな！！？」

「すっご～～い♪パパさんったら、鈍感さん？クス？」

「変だと思ったんだ！！！顔や正面の刺青洗い落としても、着替えの時とかみんな俺の背中みて笑うから・・・。シュタインと元かみさんが気づかなかったらいまだに続いたかもしれない！！あの悪魔の遊戯が！！！！」

「・・・でも、5年間も一緒に任務をやってきたんでしょ？「息」や「魂の波長」は合ってたんだね♪」

「・・・いや、ブレア殿、それは少し違うでござるよ。」

「にゃ？」

「そう、あいつは相手の実力に少しでも興味を持ったらある程度「あいてのリズム」が分かる！

・・・もし職人だったら、シュタインよりもうえだっかもしれない！！遊庵は本当に神レベルだった！！！」

「へ～～そうか、おめえがスピリットの愛娘か・・・俺のおもちゃを奪った女の娘・・・」

ギロリ！！

「（ゾクッ！！）」

「ケケケ♪てめえの魂、味わいたくなったぜ♪」

そう言いながら、遊庵は舌を出した。

そして、その舌には「魂」と書かれてた。

「（魂を味わう！？もしかして魂を本当に食べる・・・」

驚いてると、遊庵はパンチをしてした。

「ただのパンチだ！防げ！！」

「うん！！」

ガキィ！！

普通に防いだ次の瞬間

バチィィ！！

「ぐあ！！（なにが・・・起こった？）」

電撃みたいなのが流れた

彼は一体なにをした！！？

次回に続く

第3話　神への挑戦　ぶっ放せ魔女狩り　その1（後書き）

死神様「やっぱ遊庵強いね～。ていうか、スピリットくんの扱いひどくね？」

スピリット「なんで俺の周りはあんなのしかいないんだーーーー！！マカーーーーーー助けてーーーー！！」

第４話　課外補習最終回　神への挑戦　ぶっ放せ魔女狩り　（前書き）

京次「今回で補習編は終了です。最後まで飽きずに見た方、ありがとうございます！！
そして、途中でやめた方、お願いだから戻って来てください・・・」

先代紅の王「そんな事言わないほうがいいよ？逆にファンが減る。
あっ！元々ほとんどファンはいないか」

京次「いやあああああ！！！言わないでぇえええ！！」

先代紅の王「それでは、補習編最終回です♪」

第４話　課外補習最終回　神への挑戦　ぶっ放せ魔女狩り

バチィィ！！

「ぐああ！！・・・・・何が・・・起こったの・・？」

「あいつ・・・なにしやがった・・」

今起きたことに、キッド達は驚いた。

「信じられん・・魂というものは、魂の持ち主の体を完全に壊してから始めて触れることができるものだ。それなのにあの男・・・一瞬だが、あの手の刺青みたいなものを二人に見せた瞬間魂を直接触れたぞ！！」

そして、死神様はいった。

「うん！あの変な刺青はただの飾りじゃないよ。

「幻視蒼」といって、あいての精神を破壊したり魂の中に侵入して、魂を喰らう恐ろしい技だ。でも、さっきのはチョコっといじった程度だね」

「何てことだ・・・・あの男の本気の姿が想像できん・・・・」

「さてと・・・次は一気に喰っちまおうかな・・・ケケケ♪」

・・・カタカタ・・・・・

「どうした!?マカ!!しっかりしろ!!呼吸も波長も乱れてるぞ!!」

ソウルは叫んだ。しかし・・・

「・・・・あああああああ!!!!!」

マカは耳をかさなかった。

「待て!!マカッ!!!!」

・・・スッ・・

ズパン！！！！

二人共々返り討ちにあった。

「・・ゴプッ！！・・・バカやろう・・・・」

ギュ！！

「！！？」

「ケケ♪良い肌もってるじゃねえか・・・」

遊庵はマカの髪の片方を握った。

「んん・・・

「・・・マカ・・・・」

バサッ

マカはコートを脱がされた

「スピリットみたいに刺青いれてあげるぜ。それとも、呪いの呪文でもいれるか？」

すると、背後から・・・

「・・・・！？」

「バンダナ燃やすぞ！テメェー！！俺様の存在忘れんなよ！！」

タックルの態勢をとってるブラック☆スターが居た。

「・・無駄だ・・やめとけ・・」

「魂に直接攻撃できるのは、お前だけじゃねぇ！！」

「何！！？」

「オオオオオオオオオオ！！必殺！！！」

黒☆星　　ビッグウェーブ！！！

大きな星型の魂の波長が遊庵に撃ち込まれた。

この場にいた全員がブラック☆スターに

目を奪われた。

「すげえ！！」

そして、死神様も感心した

（流石だね♪ブラック☆スターの魂の波長は桁外れに大きい・・・
それに魂の波長を打ち込むことに関しては天才的だ・・・・・
だが・・・）

「・・・ケケケ♪上出来だな・・・だが惜しかったな」

「！！どういうことだ！？通じてねぇー！！」

遊庵には、傷一つついてなかった。

「死合を始める前におめえ等の魂じっくりみたからな。」

「まさか、相殺された・・・！？」

「そういう事だ・・・性質がわかれば逆に俺自身で波長を合わす事ができる。そうなれば何の攻撃力もなくなるからな。
つまり、技を出した瞬間、お前と俺は「職人」と「武器」の関係になったワケだ。」

「・・・・・」

「そんな事できるのか！？」

「観察、対応、そして、柔軟性と高い魂・・・。遊庵の一番の強みはそこだ・・」

そして・・・

ダッ！！

「なっ！！？」

ブラック☆スターと遊庵の間合いが一気になくなった。

「驚かせたお礼だ、俺も必殺技を出す・・・」

ドドドトドドド！！

色空法蓮華！！！！

「がああああああああああ！！！」

遊庵の足が刃のように鋭くなり、ブラック☆スターの身体を斬り刻んだ。

「ブラック☆スター」

「やめろォオオオオ！！」

・・・ドサ！！

「・・・・・」

「ブラック☆スター！！！！！」

そして、その映像、を見てたキッド達は・・・

「クソ！耐えられん！！・・リズ、パティー、俺たちも行くぞ！！」

「お・・・おう・・・」　「ほ～～い」

助太刀に行こうとした。しかし・・

「コラ・・待ちなさいキッド、これはあの子たちの補習だよ。それに君は死神だ、「死武専」の生徒じゃない！！」

死神様がそれを制した

「・・・・なら、今から俺らも「死武専」の生徒になるよ。父上・・生徒名簿に記入お願いします。・・・・リズ、パティー！」

「・・・・・おう・・・」　「ほいほい」

「ちとちと！君たち・・・」

息子の行動に死神様は困惑した

「・・・・・；」

そして、マカたちは・・・

「ブラック☆スター！！！」

「・・・・」

パートナを心配する椿に辰怜は言った。

「椿・・俺は逃げも隠れもしない！！俺は真の侍も目指す男だからな！！行ってやりな・・・」

「ケケケ♪ごちそうさまでした～♪」

「遊庵！！テメェー！！許さねえぞ！！マカ！！気合いれるぞ！！」

しかしマカは・・・

「・・・うそ・・」

「？」

「どうした！？」

見えてしまったのだ・・

「見え・・・ちゃった・・・・」

・・・ゴオオオ・・・

遊庵をつつむ巨大な魂が

「ケケケ♪見えちまったようだな♪」

「そんな・・レベルが違いすぎる・・・」

マカは完全に圧倒された

「おい！どうした！？マカ！！」

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・ダメ・・・勝てない・・・」

一方キッド組は・・・

「クソ・・鬱だ・・・死のう・・・」

「・・・あ～あ、またかよ・・・」「きゃはは♪」

「何という事だ・・もしかしてトイレットペーパーの端を三角におり忘れたかもしれん・・・」

こっちもある意味絶望していた・・・

そう、キッドとても神経質で、全てを完璧にしなきゃ気が済まない性格なのである。どうなに状況がやばくても・・・

「もう！いつもちゃんと出来てるじゃねぇかよ！だいたい神経質すぎるんだよ！お前は！！

早くいかないとあいつらやられちゃうよ！！トイレットペーパーなんてどうでもいいだろ！！」

この調子でいつもリズは、キッドをフォローしていた。

「どうでも良い事ないだろ！！トイレットペーパーの端をまともに折れないマヌケな死神が助けに行ったところで、救いの神とはとても言えん！！
あいつらだってぜひお引き取り願いたい気持ちでいっぱいになるだろう・・」

「そんな事ないって！！笑顔で迎えにいれてくれるって！！・・・じゃあ、ダッシュで戻って、猛ダッシュで助けに行こう！！」

「・・・・・いやだ・・・・」

「はあ！？、何で！！？」

「もしちゃんと折れてなかったらどうする・・・！？トイレットペーパーに俺という存在を全て否定されるのだぞ！それじゃ生きてゆけん！！」

「じゃあ死ね！！（怒）」「きゃはは♪」

そして、マカ達・・

「おい！！しっかりしろ！！何やってんだよバカヤローッ！！」

「うるさいっ！！ソウルは魂が見えないからそんな事言えんのよ！！」

「ケケ♪」

グッ

「・・・・それが何だってんだよ・・・・・・

お前が見たのはただの魂だろ！！未来が見えたワケじゃねえ！！

戦う前から諦めるな！魂集めて俺を最強のデスサイズにするんだろ！！

女たらしのアホ親父をぎゃふんと言わせるんだろ！！

顔をあげろ！！今俺がしゃべってんだ！！」

「・・・・」

「あいつをよく見てみろよ・・お前がグズグズしてんのに待ってくれたんだ！結構良いやつじゃねえかよ！」

「・・クス♪
ごめんソウル！！手間かけさせた！」
「おし！！ＣＯＯＬに行こうぜ！！！」
「ケケケ♪面白くなってきたぜ♪」
「行くぞマカ！！」

「「魂の共鳴！！！！」」

ピシ！！キィィィィィィィィ！！！！！

遊庵の表情が変わってきた

（魂の共鳴・・職人が武器に魂の波長を送り、それを武器が増幅させ、また職人に送り返す・・
それを繰り返す事によって強大な魂の波長を生み出す・・）

「「オオオオオオオオオオオオ！！！！！！！」」

「限界まで共鳴させるぞ！！！」

「うん！！！」

（また驚かされたぜ・・その歳で「魔女狩り」が打てるのかよ・・・・）

「一撃にかける気だな・・・」

「鎌職人伝統の大技！！」

「来い！！！お前らの魂を見せてみろや！！！」

「魔女狩り！！！！！」

ガガガガガガガガガガガガ！！！！

「はあああああああ！！！！」

（「魔女狩り」をここまでコントロール出来るとはな・・・！！！）

バン！！！

「ああっ！！！」

（しかし・・・まだ荒い・・・・・）

ドサ・・・

カランカラン・・・

「ぜぇ・・ぜぇ・・」

一撃にかけたマカは、もう満身創痍だった。

「かろうじて意識はあるようだな・・・」

スッ・・

バッ！！

「俺の・・・
俺の職人に手出しはさせねぇーーー！！！」
ソウルは身体を張ってマカを守った。

「・・・ほう、ならお前から・・・」

ガッ・・・

「合格点をあげるぜ！！保守授業おしま～い♪」

「へっ？」

「身をていして職人を守るなんざ、なかなか根性あるじゃねえか、
結構好きだぜ、そうゆうの♪」

「あの～もう一度聞くけど・・・へっ？」

ソウルは、完全にワケがわからなくなった。

「いや～頼まれたんだよ死神のおっちゃんに、お前らの補習をみろと。」

「でも、ブラック☆スター殺したじゃん・・・」

「ひゃはははは☆おもしれぇ～事いうなお前～」

ブラック☆スターは椿に膝枕されていた。

「生きてる・・・じゃあ辰怜先輩は・・？」

「悪かったなお前ら・・人を騙すような真似はしたくなかったんだか、後輩のためだ・・仕方ない・・」

辰怜も、ゾンビアートがなくなり、生前の綺麗な身体になっていた。ちなみに、辰怜の傷跡やアザはぜんぶプロに頼んで塗ってもらっていたのである。

「結構金かかったんだぞ、お前らのために。」

「ふざけんな！！なんだこのクソ話は！！全部ドッキリかよ！！」

ソウルは魂で叫んだ。

「ガーンそんな・・嘘・・・」

それを見ていた死神様は

「ほほほ♪でも成長したじゃない♪」

「しっかし、生きの良いガキの魂は本当にうまそうだったぜ！！ケケケ♪」

舌を出しながら遊庵は呟いた。

（魂をガチで食うのは本物か！！！）

「さあ！みんな！今日は疲れただろ？遠慮せずに落人村で泊まっていきな？」

そう遊庵が叫ぶとあちこちからヒソヒソと聞こえた

（あの綺麗なね～ちゃんは俺がいただくぜ）

（あの幼児体型の女の子も悪くないな）

（お、俺はあのムキムキの男の子を・・）

（白髪の少年は結構楽しめそうだぜ）

そして四人は叫んだ

「「「「絶対にイヤ！！！！」」」」

翌日

死武専

「あ〜〜昨日はマジで疲れた・・」

「私、遊庵さんに魂をパクパク食べられる夢を見たわ・・・・うう・・・」

「しまった!!遅刻して目立つつもりだったのに!!」

「ダメよそんな事・・・」

四人とも昨日の事で疲れていた。（約一名除く）

タッタッタッ！！

「オッス四人とも。昨日の補習お疲れ様」

「お疲れ～ソウル、散々だったらしいな？」

志貴と当麻が来た。

「ああ、本当に散々だったぜ。
そういえば当麻、新任の先生決まったのか？もしかして、マカの親父だったりして」

「それは勘弁してよ・・・！！」

「それが、噂では体育系の熱血教師らしいぜ？」

当麻がそういってると・・・

タッタッタッダッッ！！

「アチョ～～～～～！！」

ドカーーーン！！！（ドアが吹っ飛んだ）

「よし♪綺麗に挨拶が決まったとこで授業始めんぞ～♪」

遊庵が新任の先生だった。

「ウソ・・だろ・・」

「私初めてかも・・・「パパに会いたい」って思ったの・・・・・」

「チッ・・あいつ目立ちやがって・・・」

「・・・はあ・・・」

四人ともあっけ取られてしまった

「早速今日は少林寺拳法について教えるぞ～♪」

～SOUL　DEEPRS　補習編　完～

第４話　課外補習最終回　神への挑戦　ぶっ放せ魔女狩り　（後書き）

今回は、ＫＹＯとＳＯＵＬ　ＥＡＴＥＲのキャラが中心だったので、
次回からは別作品のキャラの出番を増やしたいと思います。

第5話　魔剣（前編）（前書き）

京次「キャラのリクエストを募集しております！もし、あれば感想の一言にてお書きください！それでは、第5話をどうぞ！！」

第5話　魔剣（前編）

とある教会

ディン・・・ン・・ディン・・・ドン・・

月下に一人の魔女が、箒に乗っていた。

『あなた達こそ、究極の武器と職人の形よたくさん魂を食べなさい・・・』

彼女は「メデューサ」

今のところ、詳細は不明である。

そして、教会の中

「オウ・・・何だテメェーは・・・」

中には沢山の不良がいた。

そんな中

「そんな・・・僕なんて・・まだまだですよ・・・「紅の王」はこんなものじゃない」

剣を持った職人がいた。

彼？の名は、「クロナ」魔剣士である。

そしてその武器は、魔剣「ラグナロク」

「ネーク　スネーク　コブラコブブラ・・」

野外でメデューサは、呪文を唱えた

すると、口からコブラのような物が出て来た

『大丈夫よ、自信を持ちなさい。クロナは「紅の王」になる存在よ・・・』

そして、コブラがクロナの頭の中に入った。

すると・・・

「フフフ・・アハハハ・・ヒッヒヒ・・・僕は紅の王だ！」

明らかに雰囲気が変わった

「俺たちの根城に入って来て、ただで帰れると思ってんじゃねぇーぞ！！クソガキ！」

一人の不良が叫んだ。

「・・教会は公共の場所・・君たちに与えられた場所なんてどこにもないんだよ。
だからラグナロクが食べてくれるよ。
でしょ？ラグナロク・・」

すると、剣の根元から唇が出て来て・・

「グピ！・・モゴモゴ・・・・」

ピエィエエエエエエエェェェエエエエェエエエェ！！！！！！！

強烈な悲鳴が、響きわたった。

「な・・・なんだあの剣・・・」

「う・・・・うるせぇ～・・・」

不良達が驚いていると

「ねぇーみなさん？何か楽しい事あった？
この教会の扉は内側に開くんだね？
アハハ・・昨日のあれ面白かったなー・・・
アレって何だっけ？
それに・・」

それに・・・僕の血は黒いんだ・・・

ピェィエエエエエエェェェェ！ギュウイイイエエエアアイイイピ
ギイイエエ！！！！！

外の静寂の中、魔女の見下ろす教会の中で
悲鳴とともに血飛沫が踊った・・・

そして、その数分前のその教会のある町

「・・クソッ！！武器職人か・・・」

「殺人鬼、ソンソンＪ

・・お前の魂いただく！！」

「汚ねえぞ！！なんでお前らばっか人を殺したい放題なんだよ！！」

タッ・・・

「？」

ズパ！！

「別にやりたい放題やってるワケじゃないよ・・・これで課外授業ノルマ達成ね」

「オウ！３つ目の魂！！
ＣＯＯＬにいただきます！！」

バクン！！　モキュ　モキュ

「ねぇーソウル？魂って美味しいの？」

「ああ！うまいぜ！！味は特にないけど、喉越しがたまんねぇ♪・・・ゴクッ」

「へぇ～・・・」

「おや、マカ殿。今終わったでござるか？」

喋っていると、剣心が現れた。

「あっ！剣心だ！」

「オッス！緋村さん！どうしたんだ？こんなところで？」

「いやあ、ここで剣道を教えることになってな、ついでにマカ殿が課外授業をやっていると聞いて・・・」

「ああ・・それでちょっと見に来たと・・」

そう話していると・・

ピクッ

「さてと、帰りますか？今、バイクまわしてくる。緋村さんは？」

「拙者は、船で帰るでござるよ。でわ・・」

「・・・待って、ソウル、緋村さん・・」

「おろ？」

「ん？どうかしたか？」

「・・・あの教会・・」

「オイオイ・・観光なら別の日にしてくれよ・・」

「違うって・・・！」

（何だろ・・沢山のたかぶった魂が・・ノイズがひどいな・・集中しろ・・）

「・・・教会から武器と職人の反応が一つ

それを取り囲むように人間の反応が５０から６０・・・」

「マカ殿・・」

「おまえ・・そんなこともわかるのか？」

「・・こんなの初めて・・多分大勢の人間はあの教会によくいる不良集団よ。

確かに評判は悪いけど、死神様のリストに乗るほどの悪人じゃないわ。」

「でも、職人だからって戦っている保証はないのでは？ほっといたほうがいいと思うが・・・」

「そうそう、今夜はサタデーナイトだぜ。
みんな仲良くフィーバーしてんじゃねぇーの？」

「でも！「死武専生」として見逃せないわ！
ことが起きてからじゃ遅いでしょ！？」

「はいはい・・じゃあ行きますか。
緋村さんは？」

「拙者もついて行く。拙者もイヤな予感がして来た。マカ殿は先にいくでござる・・」

そして、マカ達は先に教会に行った。

ブルルルルルル・・・

「けどさーブラック☆スターが人を集めて
「俺様のショーの始まりだぁ☆」的なオチだったら泣くぜ？俺。」

「それだったかいいんだけど・・」

そして・・

「着いたぜ　サンタ・マリオ・ノヴェラ教会
魂揺さぶるＣＯＯＬなたてものだ♪」

「着いた・・どうだ？教会のほうは？変化はあったでござるか？」

「おっ緋村さん！今着いたのか。」

ピクッ

「そんな！あり得ない！！」

「おい！どうした！？」

「どういうこと？一瞬で・・・」

「マカ殿！何があったでござるか？」

「大量の魂が一気に消えたの・・武器と職人を残して・・」

（この扉は開けてはならない気がした・・）

「でも、見ておかなきゃ・・死武専生として・・だれがやったか・・」

ここからは、職人と武器が入ってはならないエリア・・人知を超える「紅の王」の領域

キィィィ・・・

（・・・・）

「でしょ・・？そこの扉、内側に開くんだよ・・」

「こいつが？」

「一人しかいない・・パートナーは、どうしたでござる？」

「こんなことって・・魂反応はしっかり2つ目の前にある・・つまり・・あいつの体の中に「武器」がいる！！」

「何！？」

「馬鹿な・・・」

「メデューサ様～何か三人来ましたけど？・・うるさいな～ラグナロクは黙っててて！」

死武専

・・・の保健室

「うかつだった・・マカが課外授業中だったとは・・」

スピリットが一人嘆いていた。

「マカに会うためにはどうしても死武専に来なくてはならない！だが、大きすぎる障害がある。

遊庵！！娘に会うだけだのになんてでかすぎる壁なんだ！！
だが！！負けないぞ！！いつかまたマカとの愛を取り戻してみせる！
でもその前に、女医さんに傷ついた心を癒してもらわなくては！！」

ガチャ

（来た！！）

「待っていたよマイエンジェル？君のメディカルラブで僕の心を癒
しておくれ！！」

だき？

（・・・・・・・・）

「おお！スピリット！！探したぜ～♪」

「どしぇえええええ！遊庵んんん！！！」

「何の用か知らないけどな！お前につけられた刺青は完全に消えた！！

もう怖くなんかねえぞ！バーカ！！」

毛布に丸まっているから説得力が皆無だった

「ふーん・・じゃあ舌につけた魂って文字も消えたんだ？」

「はあ！！！？

バカか！？お前はなんてことをしやがる！！」

ベロ！

ドキドキドキ

「うっそでした～♪」

「～～～～～～～」

「イヤーでも、結婚して数年立つか～。

スピリットが結婚するって聞いた時正直不安だったぜ「絶対うまく行きっこない」マジで思った！

だけど幸せそうに寄り添う二人を見て確信した・・

大丈夫！二人の愛を永遠だ！！ってな」

「・・・・・・・;」

テクテクテク

「・・・ん?」

「え~と・・その・・お前は知らないかもしれんが・・・実は俺たち先月離婚したんだ・・」

プッ♪「知ってる」

「・・・・(プチ)・・・・」

「俺の心眼はごまかせないぜ?」

「クソッ!!テメェーはブッ殺してやる!」

「やめてください!!教師同士の喧嘩は生徒の教育に悪いから・・」

辰怜は二人を制した。すると遊庵が

「ケケケ♪・・あ~そうそう、スピリット」

「?」

急に呼ばれたスピリットは困惑した。

「・・・魔剣があらわれた・・」

教会

「どういうことだよマカ・・・あいつの中に武器がいるって？」

「んんんん・・・」

「気をつけて・・出てくる・・・」

「まあああああああああああ！！！！！」

「！！」

「ピエィエエエエエエェェェェ！！」

クロナの背中から武器が出て来た。

「まあぁぁぁ・・・」

「グピピピ・・・グピピピ」

「・・・・・」

コォォオオ・・・

「ちょえ」

すこ～ん

「あう！」

武器がクロナの頭を小突いた。そして

グリグリ・・

「痛い！痛い・・グリグリやめて・・
あう・・こづかないで・・痛いよもうやめて鼻つままないで・・
やめろよ　テメェー！！いい加減にしろ！！」

「う～う～ハイなクロナはおっかないね～」

「・・しゃ・・・しゃべるんだ・・」

マカはラグナロクに驚いた。

「死神様のリスト以外の魂を取ること、魂の乱獲は禁じられてるでござる！！
お主等は死武専の生徒なのか！？」

剣心は聞いた

「死武専？何それ？あの人が食べていいっていうんだ・・・何がい

けないのさ？」

「それより、あいつ等の魂うまそうだぜ！」

ラグナロクはクロナをいじりながら言った

「死神様に言いつけてやる！」

「やるぜ！クロナ！」

「うん・・」

パシャン！

「黒い液体になった！」

そして、液体が剣に変わった

パシッ！　ダッ！！

「下から突き上げてくるぞ！！」

ガン！

「あっ」

「遅いでござる！！」

剣心は即座にガードした

「このぉ！！」

ガッ！

そして、マカは裏拳をかました

「君もこづくの・・」

「はぁあああ！！！」

ブン！！

剣心が居合をかますが

サッ・・

かわされた、だがマカが即座に

ガッ！

「！！」

ゴッ！

大鎌を利用したかかと落としをした

「いけるぞマカ！！」

「やぁああ！！！」

「飛天御剣流　龍槌閃」

二人同時に攻撃をした、しかし・・・

「・・・」

『フフフ・・』

野外にいる魔女は笑っていた

ガガン！！

「エ！！？」

『そんな斬撃じゃあ・・』

「僕を両断できないよ？」

ポタポタ・・・

「黒い血！！」

チャッ・・

「そう・・僕の血は黒いんだ・・・／／／」

赤面をしながらクロナは言い剣を構えた

「！！」

ダッ！！

そして、距離をとった

「あいつの体・・どうなってんだ？」

「多分、あいつの血液自体武器だと思う。

だから皮膚は裂いたけど、血が固まって刃を止められた・・」

「それじゃあ、斬撃では分が悪すぎでござるな・・どうにかならんか？」

「私もブラック☆スターみたいに魂の波長を打てれば直接体内にダメージを与えられるのに・・・」

『クロナ、何を悠長にやっているの？』

「だって僕、女の子とどう接したらいいのかわからないのです・・・／／／」

『バカねー・・・殺せばいいのよ・・』

「何だあいつ・・誰としゃべんてんだ？」

すると、またクロナの雰囲気が変わった

「そっか、殺せばいいのか・・気づかなかったよ・・
髪に指を絡ませて遊ぶのを見たくない？
そこの扉・・内側に開くんだよね・・
ラグナロク・・」

悲鳴共鳴・・・・

グピ・・

ピエィエエエエエエエェェェピエィエエエエエエエエェェェ！！！！！！

「くぅ！！？うるさ・・」

ザッ　ギャアアアアア！！

剣の衝撃波がマカを襲う

「くっ・・・！」

ダッ！！

「わぁあああ！！！」

「くっ！マカ殿！！」

剣心がマカの前に躍り出た

ギャ！！！ドゴォ！！

そして、弾き飛ばされた

「ぐぁあ！！」

「剣心さん！！」

チャッ・・

そしてクロナは突きの構えをとった

「マカ！！ガードしろ！！」

ピェィエエエエエエエェェェ！！

ガン！

「んん・・・」

ガリガリガリ！！！

「ぐぁあ！！」

ズパ！！

内部でソウルは傷を負った

「ソウル！！・・・このっ！！」

ドッ　ザザ・・・

「大丈夫！！？ソウル！？」

「そんな事気にすんな！！職人のために死ぬ覚悟ぐらいで来てら！！
それにしてもやばいぜあの刀身！
悲鳴で振動を起こしてものすげぇー電ノコ状態だ！！」

ダッ！！

そして再びクロナが迫った

（どうする・・ガードもできないダメージも与えられない・・八方ふさがりだ・・
ここはいったん逃げるしかない！！）

ピエィエエエエエエェェェ！！！！

「マカ殿！！」

「っ！！？剣心さん！！」

「拙者がこいつを抑えておく！！早く逃げるでござる！！」

「でも、剣心さんは・・」

「拙者もあとから行く！！だから早く！！」

「剣心さんの言う通りだ！！早く行くぞ！」

ジリ・・ドン・・・

「！！（しめた！！出口！！）」

ドギャ！！

「ぐぁああ！！」

剣心は飛ばされた

バコォ！！

「邪魔だよ・・・」

「剣心さん！！早く逃げなきゃ・・」

グッ・・

しかし扉は開かなかった・・

「ダメじゃないか・・ちゃんと辺りを把握しておかなきゃ・・」

チャッ・・

「・・・！！しまった・・」

そう・・

そこの扉は内側に開くんだよ・・・

「マカ！！ガードだ！！」

「でも！それじゃソウルが！！」

シャ・・・

スバァァァァァァァァァ！！

悲鳴の響く教会の中・・また血飛沫が踊った

「ソウルゥゥウウウウウウ！！！！」

～後編へ続く～

第5話　魔剣（前編）（後書き）

京次「今回キッド編はグダグダになると思って、あえてとばしました・・キッドファンの皆様すみませんでした！
ついでにいうと、当麻が結構活躍する様に設定してたのですが、やっぱグダグダになるのでやめました。
本当にすみませんでした！！
では、最後にキッドと当麻の一言にて今回は、お別れしたいと思います！では、第６話でお会いしましょう！」

キッド＆ａｍｐ；当麻「不幸だぁあああああああああ！！！！！」

第６話　魔剣（後編）（前書き）

京次「魔剣士クロナの圧倒的な力に、深手を負ったソウル絶体絶命の危機のマカと剣心！！
一体どうなる？
第６話　魔剣（後編）をどうぞ！！」

第6話　魔剣（後編）

コォォオオ・・・

ドサ・・

「ソウルゥゥウウウウ！！！！」

『さぁ、クロナ・・・とどめよ。殺して魂を食べなさい』

「合点了解です。」

「やだ・・ソウル・・・・」

「バカヤロ・・早く逃げろ・・」

（拙者がいながら、情けない・・すまない、マカ殿・・）

チャッ・・

「では・・・」

バッ！！！

「ソウル・・・ごめんね・・私のせいで」

ドッ！！

しかし

「エ？何事！？僕の身体が・・」

２つの刃が、クロナの身体を貫いた

メキ・・・ドカ！！

「ガッ！！」

そして、蹴り飛ばされた

ザッ・・

「シュタイン博士・・遠野君・・それじゃあこの刃は！！」

ザッ・・

「パパ参上！！」

（どうだマカ！！このパパの勇姿を！！

しっかり焼き付けておくれ！！）

しかし本人は・・

「シュタイン博士！ソウルが！」

「応急処置は施した、だけどもうちょい見る必要があるな・・」

「（ガーン・・）見てないのね・・・」

「くっ・・すまない、スピリット殿・・
拙者がいながら・・」

「ああ、あとでじっくり聞くよ・・
しかし、「紅の王」の候補と言ってもまだ卵・・案外あっさり終わったな」

・・・むくり

「傷口の血を固めて止血したぜ！！オイ！！お礼は！！」

「うん・・ア・・アリガト・・」
「「ございました」は！？ボコるぞテメェー！！」

傷口からラグナロクがでてきた

「・・・へェ～・・・・；」

さすがのデスサイズでも、驚いた

「シュタイン博士・・何なんですか？あいつらは？」

「俺も、あんなの見たことがない・・・」

志貴とマカは聞いた

「・・・・「紅の王」・・死武専ができた理由だよ・・・」

「「死武専ができた理由？」」

数分前・・・デスルームにて

「頼んだよ、シュタイン君。スピリット君と一緒に魔剣が「紅の王」に目覚める前に止めてちょーだい」

「はい、そのために僕を死武専に戻したのですから、おまかせくださいい。

・・ついでに遠野君も連れて行きましょう。魔剣と相性がいいかもしれませんから・・」

「・・・・もう二度と「紅の王」を生むわけにはいかない・・「彼」と約束したからね・・・」

そして・・

「さて・・さて・・俺は三人の手当てをしないといけないから・・・・
遠野君、あとは頼みましたよ？」

「ああ・・分かっている・・・・」

「え！？アレって本当に遠野君！？何か雰囲気が違う・・」

「・・ハァ・・なってしまったか・・・・」

デスサイズは呆れ気味に言った

「オラ！！クロナ！！な～にダラダラやってんだよ！！サッサとしねーと、また一時間おきに起こすぞ！！」

「ヤダ！！また目の下のクマが濃くなるじゃないか・・！！僕・・クマとどう接したらいいかわからないよ・・」

『あらゆる物を殺せる眼「直視の魔眼」か・・・クロナがどこまでやれるかいい実験になるわね・・やりなさいクロナ・・・！！』

「あ・・・ははははっ！・・・ハハハハハハハハハハハハッ！！！！！！！！」

「何がおかしい！！眼鏡野郎！！！って眼鏡かけていねー！！！！」

ラグナロクは叫んだ

「あっ本当だ！！遠野君眼鏡かけていないわ！！」

「・・・くくっ俺を殺したいんだな魔剣よ・・・・いいだろう・・・」

さあ　殺し合おう
魔剣士　クロナ　ラグナロク

ダッ！！

先にうごいたのは魔剣だった

「僕、殺し合いを誘う人なんか始めてだよ
・・・どう接したらいいかわからないよ」

「食え！！かたっぱしから食え！！」

「わからないよぉ！！」

そう言いながら、斬りかかった

「・・・遅い！！」

ズパ！！

「グピィィ！！いてぇ！！」

剣自体が両断された。そして・・

「斬る・・・」

ズパズパズパァ！！！

「がはっ・・・」

クロナの身体に次々と傷口が斬り刻まれた

「嘘・・私と剣心さんでも両断できたなかったあいつの身体が・・どうやって！？」

「・・・直視の魔眼ですよ・・・」

シュタイン博士はボソッと言った

「何でござるか？その魔眼って言うのは」

剣心は聞いた、すると今度はデスサイズが説明した

「あらゆる物には発生した瞬間から決まっている崩壊の時期、つまり「死期」が内包されてるんだ・・彼にはその「死」という情報が「線」として視えているんだ」

「なるほど、どんな要因があっても、

その「線」をなぞれば問答無用で殺せるってわけか・・恐ろしい能力でござる・・」

「凄い・・それならあいつにどんどんダメージを与えられる！！」

そして、志貴がとどめにさしかかった

「さて・・終わりだ！！」

バッ！！

だが・・

・・ドス！！

血があるところからトゲがでてきた

「グゥ・・！！あの時流した血が・・・！」

・・・モコモコ・・・モコモコ

「・・！！」

空中から沢山の血の種がでてきた

ブラッディニードル！！！

ドドドドドドド！！！

「遠野君・・・！！」

「血の一滴一滴が武器になるのか！？何なんだあの性能は！？」

そして、シュタイン博士は言った

「魂の乱獲によって造られた魔剣・・ここで止めないと確実に「紅の王」になるぞ！！

それとあの職人と魔剣の魂・・

内向的な職人の性格をいじめっ子体質な武器が押し込めている感じだ。

今はまだクロナがラグナロクに反発してるからまだいいが、完全に飲み込まれた時が危険だな・・

あと、あのまとわりついてる蛇はなんだ？」

「オイ！！コラ！！またさっきの斬撃食らったら、靴に画鋲いれんぞオラ！！」

「そんなぁ～画鋲の入った靴との接し方がわからなきゃお外に出られないじゃないか～」

ダッ！！

そして、志貴が攻撃をしかけた

「わぁあああ！！！」

クロナは別の血で再生させた剣で反撃をした

「隙だらけだ！！」

ズパ！！！

そくざにまた剣を斬り落とされた

「これが遠野君の戦闘スタイル・・邪魔者を全て斬り落とした後、即座に斬撃！！」

「寝てな！！」

ズパズパズパ！！！

ガガガン！！

そして、斬り飛ばした

「・・・凄い・・」

モコモコ・・・

ドドドドドドド！！！！

また、針が襲いかかった

志貴はなんとかよけたが

フヨ・・・

「なっ！！？しまっ！！」
（クソ！！時間差か・・・！！）
「ぐっぴゃああ♪　死ね！！殺人鬼が！！」
「くっ・・・・」
ドス！！
「遠野君！！」
ザザ・・
「ハハッ！！　裁く・・・・」
「グピ・・グピ・・グピ」
辺りにはまた、沢山の血の種があった
「ぴぎゃぁあああ！！！これで終わりだァ！！殺人鬼！！ブラッディニードル！！！」
ゴォオオオオ！！
「遠野君！！！危ない！！！！」
「・・・斬刑に処す・・・・！」

閃鞘・八点衝！！！！

ズバババババババ！！！！！

恐ろしいスピードで次々と針が斬り落とされた

「ぐゃぴ～！！これでも捉えきれないか！」

気が付けば目の前から遠野が消えた

「おう！？いねぇーぞ！！ナイフ野郎どこいきやがった！！ど畜生があぁ！！」

すると、志貴はしたから現れた

「蹴り穿つ・・・・！」

閃走・六兎！！！！

下から上段蹴りを放ち、クロナの顎をとらえた

ピヨピヨ☆

「クソ！！脳を揺らされた！！早く目ぇさませ！！次の斬撃くらったらやべぇぞ！！」

しかし、クロナはまださまさなかった

「うっわ～☆星が見えるよ☆星との接し方わかんねぇ～～」

「星との接し方なんかとりあえず自然を大切にしておけ！！だから目を覚ませ～！！」

「弔毘八仙、無常に服す・・・！」

閃鞘・迷獄沙門！！！！！！

ズパッ！！ズパァァァァァ！！！！！

「理解したか？
これが・・物を殺すということだ・・・・」

「・・・速すぎて・・分からなかった・・」

マカは志貴の強さにあっけ取られた

ポタ・・・ポタ・・

「ハッ!!またハリが来る!!」

シーン

「・・終わったよ、さあ・・とどめだ」

志貴がとどめをしようとした

『まあ・・こんなものか・・もっと実験をつまないと・・・・』

ピクッ!!

「!!」

「まぁあああああああ!!!!」

「ぴぎぃえええええええ!!!!!」

クロナの身体中から針がでてきた

「何事でござるか!?」

「・・・拒絶反応が起こっている・・」

「さっきまで一体化していた魂の波長がバラバラだ・・」

『限界ね・・・「ソウルプロテクト」・・・解除』

ビク！！

「いつの間に・・！！？急に魂反応が現れた！！」

シュタイン博士も気付いた

「この反応！！魔女か！！」

コォォオオ・・・

空には、巨大な魂があった

「しかもあの魂・・ハンパじゃないあの子の身体に武器をいれたのもあの魔女か・・」

シュタイン博士は確信した

マカは疑問に思った

「・・・あれが魔女の魂・・・・！？でも、さっきまであんな強力な魂感じられなかった・・」

そして、シュタイン博士が説明した

「「ソウルプロテクト」一部の魔女が使える上級魔法だよ」

「ソウルプロテクト？」

「自分の魂の周りを魔法で包み、波長を消したり、普通の人間の魂の様にカモフラージュしたりする魔法だ」

「あれが本物の魔女・・あんなのを倒してママはパパをデスサイズにしたの・・？」

『まったくクロナはだらしがない！帰ったらお仕置きだわ・・』

そう言いながら、メデューサはクネクネと手を動かして・・

『ネークスネークコブラコブブラ・・その前にあなたたちも・・』

魔法を詠唱しながら言った

おしおきよ・・・・

「ベクトルアロー！！！！！！！」

メデューサの背中からたくさんの矢印の形をしたトゲがマカたちを襲う

「先輩！！」　「おう！シュタインいくぞ！」

「「魂の共鳴！！　魔女狩り！！！！！」」

ギャン！！！！！

ツギハギの形をした斬撃がベクトルアローを斬った

チリチリ・・・

『ふふ・・・さすがね」

シュバ・・・

メデューサの腕の刺青の蛇が実態化して、クロナをつかんだ

『今日はこの辺にしておくわ・・・』

そう言い残し、メデューサは退散した

「待ちやがれ！！」

「いや・・・先輩・・もういい。深追いはやめよう、ソウルが心配だ・・・」

（・・・・・ソウル・・・・）

ポン

「・・・パパ・・・」

「さぁ・・・帰ろうか・・」

デスサイズは娘を慰める様に言った

そして、死武専

女子シャワールーム

ＫＩＬＬーコーンガーンコーン♪

「課外授業どうだった？」

「結構いい感じだったよ」

「マジであたし明日絶対補習だよ～」

女子がワイワイ話していた

「補習ならマシじゃんソウル＝イーターって子が今日大怪我で運ばれたってさァ」

「ウッソ！！それやばくない！？」

「エッ・・ソウル君が・・・！？」

そして、そこには椿もいた・・

そして保健室

ガチャ・・

「シュタイン博士!!」

「あら？ずっとそこで待ってたの？
シャワーでも浴びてくればよかったのに」

「どうなんですか？ソウルは・・」

「ヘラヘラ・・手術は成功です、後は安静にしてれば大丈夫でしょう・・」

「よかった♪ありがとうございます!!」

マカは大喜びした

「あの～ソウルの顔見てきてもいいですか？」

「ああ・・いいですよ」

「はい♪」

パタン・・

「・・・ん？」

「変な作り笑いしてんじゃねぇよ・・」

後ろには、デスサイズ、遊庵、剣心がいた

「でっ、本当のところソウルの容体はどうなんだよ？担任として、一応聞きたいな」

「拙者も、今回の件で責任があるでござるからな・・」

「・・・傷が大丈夫なのは確かだよ。ただ一つ気にになってね・・」

「気になること・・・？」

「呪いと言えばいいのかな・・」

「呪い？どういうことでござるか？本当に大丈夫でござるか？」

「魔剣ラグナロクの黒血がソウルの血に混ざってしまった。今のところどうなるか不明だよ」

ダッ！！

「マカ殿！！」

剣心は急いでドアを開けた

「おい！緋村！！」

デスサイズの声も届かなかった

「なぁ？何で緋村のやつあんなに責任感じているんだ？普通、近くにいただけであんなに必死にならんだろ？」

遊庵はデスサイズに聞いた

「・・・マカが此処に入学してから、俺の代わりに、ずっと世話してんだよ・・マカは知っての通りに俺のこと大っ嫌いだからな・・だから緋村を俺の代わり、薫ちゃんをママの代わりになってるんだ。」

「なるほど、だからあれだけ親しいんですね
マカちゃんと緋村は・・」

シュタイン博士は納得した

「逆に言えば、緋村はマカのことを、まるで自分の娘の様に思ってるんだ。だからあれだけ心配するんだ・・」

「マカ殿・・・」

「・・・・ソウル・・・・」

剣心が見たのは、とても悲しい顔をするマカだった

（俺の職人に手出しはさせねぇ！！）

「ごめんね・・・」

（俺は職人のために死ぬ覚悟ぐらいできてんだよ！！）

「私のために・・・」

ポタ・・・

「ずずっ・・待っててね、私もソウルみたいに強くなるから・・！！」

涙の決意を、マカは誓った

（俺は・・・また失うところだった・・大切な人を・・・）

剣心は、かつて失った妻と、マカを重ねた

（今度こそ、守りきるんだ！！たとえ相手が魔物であろうと、紅の王であろうと、俺の目の前にいる全ての人を、死なせはしない！）

「そのためにも、もっと強くならなければならない！」

「えっ！！？剣心さん？何時の間にいたの？」

「おろ？気付いたでござるか？」

剣心は、つい心の声が漏れてしまった。
それに気がついてマカは我に帰った

「けっ剣心さん？もしかして聞こえてた？」

「え～・・「ソウル・・・」と、つぶやいた辺りからいたでござるよ・・」

「全部聞こえてたんだ・・・」

「「・・・・・」」

互いに黙り込んでしまった

そして・・

「「あっ・・・あはははは・・・・；」」

乾いた笑いしかでなかった

すると・・・

どっ！！

びくっ

「「！！！？」」

「大丈夫か！！ソウル！！！！」

ブラック☆スターが来た

「しっかりしろ！！俺様が来てやったぞ！！目を開けろ！！俺の笑顔はハッスルの源だぜ！！」

ブンブンとソウルの顔を揺らしながらブラック☆スターは言った

「ブッブラック☆スター！！」

グシャ！！

マカチョップが炸裂した

「ごめんなさいマカちゃん・・・」

ベッドにもう一人患者が増えた

（ごしごし・・）
「・・へへ♪」
マカは涙を吹いて椿に笑顔を見せた
カッ・・・
「あらあら、ドア壊しちゃって・・」
「！！」
「ずいぶん賑やかじゃないの♪」
「おや？ずいぶんお客さんが多いですね？」
にょろっと2人の保険医の先生が現れた
「「メデューサ先生、藤田先生、こんばんわ！！」」
「オウ！！ソウルを見に来たのか？」
3人とも挨拶をした。だが、剣心は
（あの女医、新任か？しかもどっかで見たことある様な・・・
そして、藤田というやつはもしや・・）
「あの～マカちゃん？」
「はい！なんですか？」

「足にへばりついてるお父さんはがしてくれるかしら？」
「さっきから私がはがそうとしても、なかなか離れないんですよ・・・」
藤田先生がはがそうとしているさきには
「白衣を着たマイ・エンジェル？
今日こそ君のメディカル・ラブでぼくを癒しておくれ？」
デスサイズが足にへばりついてた

グシャ！！

またもやマカチョップが炸裂した
「・・・ハァ～スピリット殿・・・」
剣心は呆れてしまった
「それにしても、ソウル君大変だった様ね」
「はい、すみません。私のせいなんです・・」
すると、メデューサ先生はポンっとマカの肩を掴んだ

「元気だして！！マカちゃんはもっと強くなるわ！！」

そして、マカは笑顔を戻した

「・・はい！！」

しかし、マカの笑顔とは裏腹に、メデューサ先生は邪悪な微笑みをしていた

そして、先ほどからずっとニコニコとしていた藤田先生の目から少し眼光がさした。

第6話　魔剣（後編）（後書き）

先代紅の王「次回はソウルイーターで有名なあのキャラが登場します！
第7話お楽しみに～」

第７話　聖剣伝説　その１　それぞれの野望（前書き）

京次「それぞれのキャラのイメージが崩れるかもしれませんので、見る際には、ご注意ください！　それでは、ＳＯＵＬ　ＤＥＥＰＥＲＳ　第７話　どうぞ！」

第7話　聖剣伝説　その1　それぞれの野望

（・・・・・・・・どこだ・・・ここは・・
暗い・・・自分の身体すら見えない・・・・・・苦しい・・）

暗黒の空間の中、ソウルはさまよっていた

（どこが上で、どこが下だ・・・どこに行けばいいんだ・・・助けてくれ・・・）

カァ・・・

（光・・・？出口か！？）

「いや・・・やめて・・・！」

（声！？マカ！！マカの声！！待ってろ！！今いくぞ！！）

「ソウル！！！」

メキメキミキ！！

「マカ！！」

「いやぁあああああああ！！！！」

そこには、マカのお腹からでて来たソウルがいた・・・

「っ！！！」

「うわあああああ！！！！」

保健室で、ソウルの叫びが響いた

「ソウル！！」

「あぁああ！！」

「どうしたの！？」

「何かあったんですか！？」

「メデューサ先生！！藤田先生！！ソウルが・・・」

マカの握るソウルの手は震えていた、しかし

ギュ・・・クイクイ・・

「ソウル・・・」

「はぁ・・はぁ・・大丈夫だよ・・・

大丈夫！やな夢を見ただけだ・・・」

「ほっ・・良かった・・・」

マカはとても安心した

「よかったわ、でも、何かあったらすぐに呼んでね♪」

「念のために、熱を測っときましょう・・終わったら呼んでくださいね・・」

そういい、藤田先生はソウルに体温計を渡した

（ラグナロクの黒血が混ざったソウル＝イーター・・この子も研究対象になりそうね・・・・）

メデューサは獲物を見る様な眼でそう思った

カー・・・カー・・・

「さてと・・今日は帰るね。あ、喉乾いてない？帰るまえに何か買ってこようか？」

「ああ、いいよ・・飲むとションベン出るだろ？頻繁に出ると、どうも落ち着かねえから・・」

「そっか・・替えの下着以外に何か持って来て欲しいものある？」

「ん～・・別にないなぁ・・」

「そっか・・」

「・・・あのさ・・俺がこうなったのは自分でやったことなんだから、お前が変な気負いすることないからな！」

ソウルはマカに気遣い、なるべく明るい表情で言った

「・・・ごめん・・」

しかし、ソウルの考えと裏腹に、マカはションボリと保健室をでた

「・・・やっべ・・しくった・・逆にへこませちまったか・・」

ギィ・・・バタン・・・

「・・・バカじゃないの・・私・・・ソウルに心配かけさせてどうすんだよ・・」

マカは自虐的に言った

カッ

「!?・・・パパ・・・・!?」

スピリットが現れた

「屋上いかない?夕日が綺麗だよ♪♪」

ニコニコと、そう言った

そして、図書館で・・・

「でっ・・・俺様にどうしろってんだ？」

「掃除だ！掃除！図書室の整理をしろ！」

ブラック☆スターと辰怜が居た

「はあ！？やだよ！！めんどくせぇ～」

「お前な～・・今回の課外授業で魂一個もとってないだろうが！！」

「それで補習なんだろ？っんなのとはいつもやってっからわかってんだよ・・

こんな地味な補習やだよ！掃除！？目立たねぇじゃん・・お前やれよ！

何か他にないの？遊庵と戦ったときみたいなの？」

「ブラック☆スター・・お前の実力はクラスでもかなり上のレベルだ、なのに「万年の０個補習マニア」・・頑張っている椿が可哀そうだろうが！
お前に必要なのは罰だ！嫌なことやって悔い改めろ！！後で見にくるからな、ちゃんとやっとけよ！！」

「・・・良かったら手伝ってもいいんだぜ！！」

「誰がするか！！誰が！！
いいか、ちゃんとやっとかなかったら、もっと嫌な補習させるからな！！」

「ハイハイ・・わかったからさっさと行け熱血野郎・・」

バタン・・・

「チッ・・ど～すんだよコレ・・・」

そう言いながら、螺旋状に続く沢山の本だなを見上げた

１０分後・・・

「ひゃはははは☆カリスマ・ジャスティスさいこ～～♪
こいつは俺の次にＢＩＧなやつだ！！」

偶然見つけたマンガを読んでいた

「図書室にマンガがあるんだな！！明日遊庵のつまんねぇ授業抜けて、また来ちゃお☆」

すると・・

「おい君！図書室では静かにしたまえ！！」

「そうですよ！！あと、本で山をつくって座ってはいけません！！」

「あ！！悪りぃ・・ん？キッド！？それとシエル！？」

キッドとシエルが来た

キッドは知っての通り、最近転校した死神様の息子である

シエルは、「月姫」のキャラでありエクソシストである

ここでは、志貴とマカたちの先輩であり、辰怜の後輩である

「何だ、お前たちもお仕置きくらったんか？」

「違いますよ・・本を借りに来たんです！
昨日興味深い本を見つけたのですから・・」

「そうそう、俺もそれを読みたくてな・・君の尻のしたにある本が取りたいんだが良いかな？」

「ああ、これか？」

そう言い、キッドにその本を渡した

「あ♪これですね♪間違いありません！」

「うむ♪そうですね♪」

「何なんだ？それ・・・？」

「エク・・・エックス・・ダメだ・・読めねぇ・・」

すると、キッドは言った

「エクスカリバー」

「それ何？」

「聖剣と呼ばれている伝説の剣だそうだ・・・」

それに続く様にシエルが説明した

「その剣を地面から抜き、解き放ったものは勇者と称され永遠に讃えられる・・過去にエクスカリバーを手にしたものは王にまで登りつめたと聞いています。」

言い終わると、3人の表情がパアっと明るくなった

「さぞかし美しいシンメトリーの剣なのだろう♪スバラシイ！！」

「勇者、王！！俺様にピッタリじゃん！！」

「これさえあれば！！あのアーパー吸血鬼から、遠野君を引き離せる！！これで、カレーデートが現実のものに！！」

3人が聖剣の話で盛り上がっていると

「コラーー！！ブラック☆スター！！」

「お！！ビリビリだ！！」

「ビリビリ言うな！！」

ビリビリと呼ばれた彼女の名は「御坂美琴」
とある魔術の禁書目録のキャラである
ここでは、マカたちの同級生であり、風紀委員である

「御坂さん？どうしたんですか？」

「シエル先輩！こいつ補習の掃除やってないのですよ！！辰怜さん

に言いつけてやる！」

「そうだったんですか！？てっきり本を読みに来てるかと思った・・通りで珍しいなと思いました・・・」

「もう・・こいつがまともに本を読むわけないでしょうが！！ちゃんと注意してくださいよ！！」

「すみません・・３人で聖剣の話で盛り上がってたものだから・・・」

すると・・

「聖剣！？何ですかそれ？」

（しめた！！ビリビリが話に突っかかって来た！うまく乗せれば説教受けずに済む！）

「ああ！今から3人で聖剣を手に入れようとしてな、お前も一緒にくるか？死武専で一番になるのは確実だぞ？」

そう言い、御坂を誘った

「死武専で一番ですって・・・」

（やべっ・・ミスったか？）

「その話本当！？本当なら一緒に連れて行って！いいですよね！？シエル先輩！！」

「え！？あ～いいんじゃないですか？ですよね？２人とも・・」

「「あ・・ああ・・いいんじゃねえ？」」

「・・・みたいですよ・・」

「やったー！！ランクアップ間違いなし！！これで辰怜の暑苦しい話聞かなくていいんだわ～」

「・・・あいつも辰怜のこと嫌いだったんだ・・・」

ブラック☆スター呟いた

「まあ、結果的には行く人数が４人になってしまったな。これ以上人数を増やしたくないな・・早速行こう・・」

キッドはそう言い、４人は行こうとした瞬間

「ああ・・エクスカリバーね・・」

ずいっとシュタイン博士が現れた

「何だ？博士もお仕置きくらったんか？」

「？何を言ってるの君は・・？」

「博士！聖剣について何か知っているんですか？」

御坂がそう聞くと

「聖剣エクスカリバー・・俺にも無理だったよ・・・」

「何!?チャレンジしたのか?」

「博士にも抜けなかったのですか・・・」

シエルとブラック☆スターは驚いた

「・・・・・」

シュタイン博士は何か複雑そうな表情をした

「聖剣エクスカリバー・・」

「「「「ごくりっ」」」」

「興味津々だぜ!」

カー・・・カー・・・・

「ほらほら、見てみ、マカ！あの眠気を必死におさてる夕日の間抜けヅラを！」

「うん・・・・」

マカはまだどんよりとしていた

ニコニコ♪

「「・・・・・・」」

（やばいぞ俺！！ヤヴァイ！！せっかくマカとしっとり話すチャンスが来たってのに何を話したらいいのかわからない・・）

すると、マカはおもむろに本を取り出した

ペラペラ・・・

（あ～あ・・マカが飽きて本を読み出しちゃったよ・・何か言わな

きゃ・・なんか気の利いたこと・・早く・・・・）

「コラ、本は明るいところで読みなさい」

ボソっとそう言った

じぃー

（うそ～ん・・いきなり説教かよ・・）

スピリットは自分に呆れた

パタン・・・

「ねぇ・・・パパ・・・・」

「んん！？」

「ママのこと、どう思っているの？」

マカは唐突に聞いた

（ココは間をあけちゃいけない！！！）

「もちろん愛してるよ！！」

「じゃあなんで浮気ばっかするの？」

スピリットの言葉を遮る様にスパッと言った

「・・・・・・・・・・・；」

「・・・・・・・・・・・」

（しまった！！間があき過ぎた！！これじゃあ次に何を言っても説得力がなくなる・・・

頑張れ俺！！全国の父親が俺の見方だ！！逃げるな娘に立ち向かえ！！逃げるな～！！）

「何か冷えてきたね、そろそろ戻ろっか？」

「何で？今きたばっかじゃん」

（逃げられませんでした！！）

スピリットは全国の父親を裏切った

（プレッシャーの与え方がママに似てきたなぁ・・・）

マカちゃん、パパはね、マカとママを一番愛しているんだよ・・ほんとだよ・・

本当だってばぁあ・・・！！！

ブリテン島北部

「ここか・・・」

キッドは滝を見上げながら言った

「地図だとそうみたいですよ！」

「この上に聖剣があるのか？」

ブラック☆スター聞いた

「ええ・・正確にはここを登ると、洞窟があるみたいです。剣はその奥ですね・・・」

「だけど、この壁をどうやって登るっていうのよ・・・」

そう言ってると、キッドは手からスケボーを出した

「お？スケボー？」

カッ

そして

ゴゴゴゴゴゴ・・・

「ジェット噴射！！？」

「うお！！きたねぇー！！」

「くっ！負けられませんね！！はあ！！！」

バッ！！

シエルは大ジャンプした

「クソ！俺様も負けられねぇ！！」

ブラック☆スターは崖を登ろうとすると

「ちょっと待ってよ！私も上に行きたいの！！お願い！担いで！」

「あー！！めんどくせー！！さっさと乗れ！！一生で一回だからな

！！」

「べっ別にあんたが好きだから行ったわけじゃ・・・／／／」

御坂がデレてると

「うっしゃ！！いくぞ！！」

「え！？ちよっま・・・・」

「ぅぅうおおおおおおおお！！！」

ガッガッガダガッ！！！

「きゃぁあああああああ！！！」

「だぁ！！！！」

ズチャッ！！

「よし！！ついた！！」

「ほ・・・本当に一生に一回でいいわ・・」

妖精の楽園　「悠久の洞窟」

「キッドたち、どこいった！？」

「この洞窟の奥じゃない？ってシエル先輩！！先行ったんじゃないですか！？」

シエルは入り口の前に立っていた

「いや～実はキッド君が・・・」

「ブラック☆スター・・・下が泥で降りられん・・靴が汚れてしまう・・」

「何やってんの？お前・・」

キッドが出っ張った岩にナマケモノの様にぶら下がっていた

「頼む、おぶってくれ・・・」

「バーカ、一生やってろ！」

「キッド君・・こんな所で悪いくせが出るなんて・・・」

「ちょっ！！助けてあげましょうよ・・」

先にすすもうとする2人をシエルは止めようとした

「こんな難関が待っていたとは・・聖剣への道・・なんて過酷なんだ！！」

そして・・・

グチャッ！　グチャッ！

ポタポタ・・・

「お前マジ使えねぇ～・・・」

ブラック☆スターはキッドをおぶっていた
ちなみに、女子2人は普通に歩いています
キッドは傘をさしています

「上からの水滴は俺に任せろ！！したの泥は頼んだぞ！！上下からの仕打ち・・これは難関だ！！」

「ホントお前使えねぇ～」

「まあまあ、人それぞれの価値観ですから・・・」

シエルはそう言った

「ん？前から何かくるわよ・・・」

御坂がそう言い、来たのは・・

パタパタ・・

「あら？」

「きゃーっ妖精だ！！可愛いー！！／／／」

御坂は大はしゃぎした

「おお！！マジだ！！ちっちぇえ～」

そして、キッドは聞いた

「エクスカリバーはこの先にあるのか？」

それに続く様にシエルも聞いた

「どんな場所にあるのですか！？やっぱり番人や鍵とか必要ですか！？」

すると、妖精は・・

「・・・・・・うん・・・・」

苦虫を噛み潰したような顔で一言いい去っていった

「何だよ感じわりいな・・・」

「私の質問に答えを返さなかった・・私のこと嫌いなのかな・・・？それとも、単に言いづらかったのかな・・？それとも・・」

シエルは少し落ち込んでいた

「あんま深く考えない方がいいんじゃないですか？シエル先輩・・・」

御坂は慰める様にいった

そして

「ここが行き止まりのようだ」

「おい・・あれが？」

「うむ・・間違いない」

「「「「聖剣エクスカリバー！」」」」

オオオオオオオ・・・・

「す・・すごいわ・・」

御坂は驚いていた

「空気が振動しています・・・この本に書いてある聖剣を手にしたものは勇者と称され永遠の栄光を与えられるというのは本当のようですね・・・」

シエルは言った

「それに見てみろ・・精密に描かれた装飾・・刀身には傷一つ見当たらない・・美しい！！

まさに聖剣の名にふさわしい！！

選ばれた勇者しか引き抜くことができない・・・」

・・・ごくり

「「「ほ・・欲しい」」」

三人が口を揃えて言っていると

「ワーイ！！　俺勇者！！！」

ブラック☆スターが先に剣を抜いていた

「「「えーーーーー！！！！？」」」

「何であのバカが抜けるのよ！！やり直しよ！！やり直し！！」

「そんな・・遠野君とのデートが・・み・・認めません！！そんなの！！」

「そんなばかな・・何かの間違いだ！！君はお世辞にも勇者の柄じゃない！！やり直さないか？」

「エエ？何だよノーカンかよ・・ちえっ！！

いいぜ☆何度やっても同じだぜ！！」

「今度は俺にやらせてくれ・・」

そしてキッドが剣を抜こうとした

「ムリだよムリ！聖剣はＢＩＧな俺様を選んだんだ！！」

「いいから黙って見ときなさい！！」

「しっ！！キッド君が抜きますよ！！」

・・・ドキドキドキドキ

しかし

「今まで誰が触って来たかわからんからな」

キュキュ・・

「「「早くやれよ！！！」」」

そして

「抜けたぞ」

当たり前のように抜かれた

「はあ！？何だよこれ！！次ビリビリやってみろ！！」

「え！？私？わかったわ・・・・」

そして

「あれ？あっさり抜けた・・・シエル先輩もやってみたら？」

「あ、はい・・どういうことですか・・あの聖剣が・・？」

そして

「やっぱり抜けますね・・・・」

「どういうことだよ！！穴がガバガバになってんじゃねえの！？」

すると突然・・・

ポゥ・・・・

「「「「？？」」」」

【よく来たな・・若者たちよ！！】

「「「「聖剣が・・・」」」」

剣の光が徐々に増してきた

【挨拶が遅れたな・・私がエクスカリバーである!!!】

カッ!!!!!

「・・・・す・・・すげぇ・・・」

「「しょぼっ♪」」

「「・・・・・;」」

ブラック☆スターと御坂は笑い、キッドとシエルはボーゼンとしていた

なにせ、目の前に現れたのは自分たちの身長の半分くらいの謎の白い生物が聖剣の正体だったから

そして、死武専

「テケテケテケ～♪ジャーンプ！！」

サッ・・

「・・・・・・；」

指でマカと遊ぼうとしたら、逆に引かれた

「・・・・・・ず～ん・・」

「ねぇ・・パパ・・・シュタイン博士が言ってた死武専ができた理

由って何？
紅の王の候補って言ってるラグナロクって何なの？
教えて！！パパ！！ソウルをやっつけた相手のこと！！」

「・・・・・」

ゆがみのない目で自分の父デスサイズを見ていた

そして、父は口を開けた

「なぁマカ？
ここにいる遊庵や辰怜は「真の壬生一族」
じゃなくて、「造られた命」っていうのは知っているよね？」

「うん。それに、「先代紅の王」も、「壬生京四郎」も真の紅き眼をしていたけど、本当は、造られたもの・・・結局、「鬼眼の狂」だけが、本物だった・・・」

「うん・・・けど、その真実が知られる、はるか昔・・
つまり、江戸時代が始まる前に、いやそれより遥大昔・・
日本の歴史は裏では全て「壬生一族」が操っていた。壬生一族は神の一族とし崇められ、その最高責任者「先代紅の王」は「宇宙の理」と呼ばれるほどだった。
はじめの頃の紅の王は、とても優しく民主的で人間そして、同じ一族からも愛される存在だった・・・だかある日を堺に紅の王は人間の前で姿を現さなくなった。人間界を侵略し、同じ一族を支配した。そして、多くの人間の魂を奪い、日本の暗黒の歴史の始まりとなった・・・・。
「死神武器職人専門学校」は職人と武器。そして超能力者や侍が若いうちから管理し教育する場所さ・・二度と「紅の王」のような邪

神を産まないようね」

「じゃあ、あのラグナロクも？」

「うん・・あのままほっといたら間違いなく「紅の王」になるだろう・・・」

（魔剣だけじゃない・・「紅の王」になる可能性を持ったものはまだいる・・
それにソウルも・・・）

そして、図書室

「御坂のやつ遅いな・・・ブラック☆スターはちゃんとやってるのか？」

中はスッキリしていた

「おお！！やればできるものだ！！地球がひっくりかえっても雑にやると思ったのに・・・」

「あっ♪辰怜先輩！この本しまえばおわりです♪」

「オッスお疲れ様～」

「椿！！？上条！！？」

そう、ブラック☆スターは椿と当麻にそうじを押し付けたのだ

「あのたわけ！！2人に押し付けてどこに行った！！」

「そんな、いいんですよ、私　お掃除好きですから♪」

「しかし、あいつ上条さんに押し付けるなよ～・・はぁー不幸だ～・・・」

当麻が愚痴ってるとシュタイン博士が口を開いた

「ブラック☆スターならキッドとその他2名で聖剣をとりにいきましたよ。何かまずかった？」

「シュタイン博士・・聖剣ってあの聖剣ですか？」

辰怜は聞いた

「そう、エクスカリバー・・・」

「空を裂き、地をもちあげる・・伝説の剣」

「「・・・・・・・」」

先にシュタイン博士が口を開いた

「考えるのはよそう」

「そうですね、やめておきましょう。
さてと、他を回らなきゃな～」

「「？」」

椿と当麻は顔を見合った

そして、ブラック☆スターたちは

「おまえが聖剣？そのなりで？超しょべぇー」

ブラック☆スターこれでもかっと色々と言った

「・・・・ププ・・」

キッドは今にも笑いそうだった

「プハハハハハ！！！！聖剣！！？あの白身魚みたいなやつが！！？今年一番の大笑いなんですけど！！？ハハハハハハ！！！！」

「ダメですよ・・！笑っちゃ、仮にも聖剣なのですから・・・ププ・・！」

御坂もシエルも笑ってしまった

「では聞くが、君はそのなりで何者なのだ！？」

エクスカリバーはブラック☆スターに向けた

「俺か？俺はブラック☆ス「私の伝説は１２世紀から始まった！！」

いきなり、遮る様にエクスカリバーは

口を挟んだ

「君たちはみたところ、職人や超能力者のようだな？どこから来た？」

今度は御坂に杖を向けた

「いちいち杖を向けないでよ・・うっとうしい・・・」

そして、今度はキッドが言おうとした

「俺たちは死武専「そうだ、いいものを見せてやろう・・」

「聞いといて聞かないのね・・・」

御坂は完全に呆れていた

「なんだあいつ・・・服着るんならズボンも履けよ」

「何を見せる気なんでしょうね・・お宝とか？」

しかしシエルの予想は当たらなかった

「私の武勇伝が聞きたいか？」

今度はシエルに向けた

「杖を向けないでください！行儀が悪いですよ！」

「武勇伝が聞きたいか？」

「杖をどけてください！！聞こえないのですか！？」

「君たちはどこから来た？」

「だから死武専ってさっきから言おうとしてるじゃないですか！！」

「1から12で好きな数字はなんだね？」

またブラック☆スターに杖を向けた

「あん？1から12？

もちろん1だ！俺は1番時ゃなきゃきがすまねえ！！」

「8だ8！シンメトリーだからな・・」

「私は7ですね！ラッキーセブンの7、！縁起がいいですから。」

「ていうか、なんであんたにそんなの教えなきゃならないのよなんか意味あるの？」

御坂は疑問に思った

「ヴァカめ！！君たちに選択する権利はない！！
私の伝説は「１２」世紀から始まったのだ！！」
「好きなもの選べって言ったじゃないの！！
なんなのよ本当に！！」
しかし、エクスカリバーはソッポ向いた
「だいたい何が伝説の聖剣だよ！！なんなんだの本は！！誰が書いたんだ！！」
「そうよ！！その本が全部悪いのよ！詐欺よ詐欺！！」
「著者を教えろ！！死神の権限で死刑に処す！！」
「ちょっと見せてください！著者　「エクスカリバー」・・・」
「「「「お前か！！！！！」」」」
「サインはやらんぞ」
ポーズを決めてエクスカリバーは言った

そして図書館

「シュタイン博士・・聖剣ってどんな武器なんですか？」

椿は聞いた

「あれね～
手にしたものは光の翼をまとい瞬間移動も可能にする。
そして剣の一振りは空間をも切り裂く！！
この世に存在する武器で間違いなく最強だろうね」

すると、当麻が口を挟んだ

「でも、そういうのって選ばれた人しか「魂の波長」が合わないん

でしょ？
上条さんみたいな不幸体質は一生あわないでしょうね～」
しかし、答えは意外な返答だった
「ん～と、そうでもないんですよ・・・
以外と誰とでもあっちゃったりするんだよね・・・・；」

そして、ブラック☆スターたちは

「「「「・・・・・」」」」

４人共たくさんのレポートを手に持っていた

「私の職人になるに当たり・・・守ってもらいたい１０００の項目がある！
レポート用紙にまとめておいた
しっかり目を通しておくように！」

「裏までびっしり書いてあるぞ・・・」

「以外と几帳面なんですね・・」

「こういうのが几帳面っていうんですか？」

「４５２番目の私の５時間に及ぶ「朗読会」にはぜひ参加願いたい！」

【でわ！！】

エクスカリバーが剣の姿にもどった

オオオオオオオ・・・・！！

【君たちは選ばれたのだ、そして！！手に入れる！！勝利と栄光を！！】

「「勝利！！！」」　「「栄光！！！！」」

カァアアア・・・！！！

【さぁゆこう！！　ともに！！！】

「「「「サクっと」」」」

４人同時に、剣を地面にさした

「バーカ！！！誰がお前なんかを！！」

「虫酸が走るわ！！」

「あなたと組むぐらいなら、吸血鬼と組みます！！」

「二度のあたしの前に現れないで！！」

そして、シュタイン博士はいった

「いくら「魂の波長」が合っても、エクスカリバーと「人としての波長」が会うやつがいないんだよ」

【待て！！待ってくれ！！よし！！わかった！！！１０００の項目を８００まで減らしてやる。
でも朗読会には参加してもらいたい】

しかし、誰も聞かなかった

「あいつと付き合えるやつはある意味勇者だな・・」

「虫酸ダッシュ！！」

「期待した私がバカでした・・・」

「はぁ・・・家帰って寝よ・・・」

そして、入って来たように帰った

すると、また妖精がやって来た

「あら、エクスカリバーには会えたの？」

すると、４人共苦虫を噛み潰したような顔になった

「・・・会えたみたいね・・・」

次の日

（おはよう！）　（うーす！）

昨日の４人が廊下であった

「「「「・・・・・」」」」

ギュ・・・ギュ・・・

「みんな・・お互い　いいパートナー持ったな！！」

「うむ！！」

「パートナーは大切ですね！これからもよろしくね、セブン！」

「べっ別にあんたが、いいパートナーだなんて思ってないからね！当麻！！／／／」

「？」

互いのパートナー全員不思議に思った

タッ・・・

「うっす！！皆さんお揃いで！！散々な目にあったんだってな！ブラック☆スター！
キッド！ビリビリにシエル先輩！」

全員「ソウル！！」

ソウルとブラック☆スターは拳をコンっとぶつけ合った

「もう大丈夫なのか？お前がいないとやっぱ盛り上がらねぇよ！」

「オウ！！サンキューな！！」

（クスクスクス）

喋っていると、周りから笑い声が聞こえた

「おい、ブラック☆スター・・さっきから笑われてる気がするんだが・・」

「エ？」

（クスクス・・あの４人やっちゃったの？）

（御坂さんも？意外だ～）

（シエル先輩まで？イメージ変わったぜ～）

「ちょっと４人共！！早く教室に来て！！」

マカが４人を呼んだ

「「「「？？？？」」」」

そこには、それぞれの名前が書かれたエクスカリバーの写真付きの花輪が飾られて

そして、一番上に「いつでも待ってるよ」と書かれていた

「「「「マジかよ・・・」」」」

４人共呆気とられていた

「うわぁ何コレ・・・」
「ああ・・・きついな・・」
ソウルもマカも引いていた
「ホントうぜぇー・・・・」
「虫酸ダッシュ」
「我慢なりません・・！」
「死ねばいいのに・・・」
と、また苦虫を噛み潰したような顔で言った

～聖剣伝説　その１　完～

第7話　聖剣伝説　その1　それぞれの野望（後書き）

京次「シエル先輩とビリビリのあの顔は各自ご想像ください！
ちなみに、服装は、シエルは死武専では、いつも通りの制服。外に
でたときはあのシスターぽい戦闘服です。
御坂もいつも通りの制服です。」

先代「それでは、次回までこきげんよう
次回は物語が大きく変わります！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0308x/

SOUL DEEPERS

2011年10月13日01時55分発行